

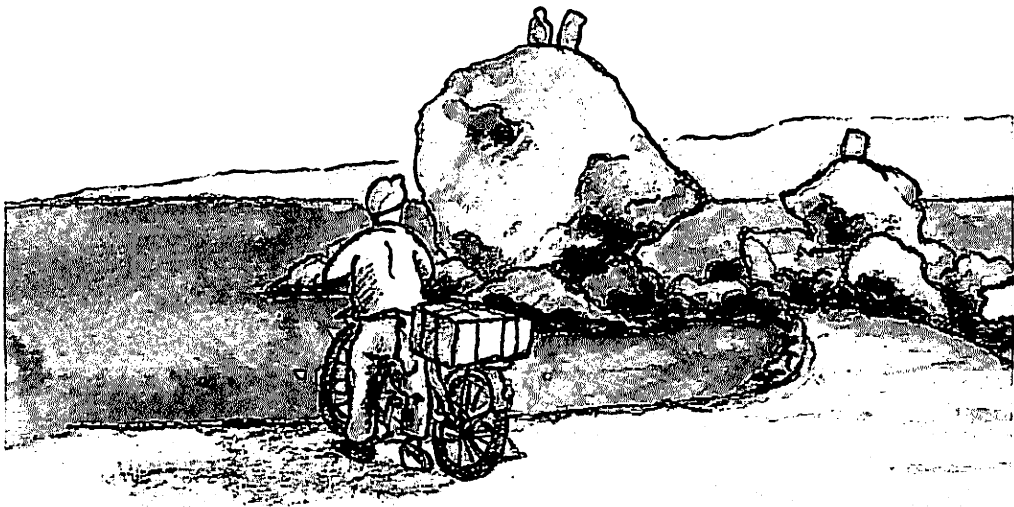
人生で二回と

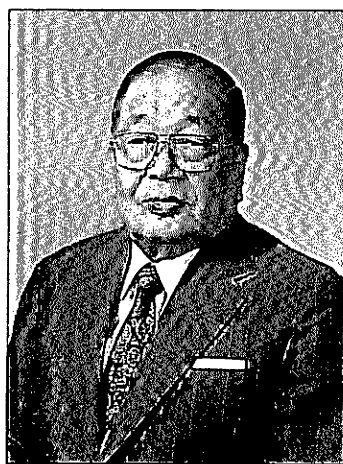
丸本栞八



人生でこぼこ

丸本柳八





はじめに

このたび、会社創業五十周年を記念して、私の回顧録を発刊していただく事になり、大へん嬉しい気持ちでいっぱいです。八十二年の人生で命をかけた自分の仕事を選び出し、何度となく丸裸になりながらも、前へ進むことをあきらめず励んでまいりました。苦しいことの後には必ず喜びがある。苦境を乗り越えることが又、幸せをつかむ源になっていく。私の人生もこのくり返りで、まさに「人生でこぼこ」でした。

今回の五十周年を基に百周年を見事勝ち取ることを祈るだけです。闇夜に手探りで手と頭で判断して勝ち取ることを祈るだけです。私の人生でこぼこも続く限り、人のため、世のために懸命に尽くしたいと思えます。この回顧録の発刊に当り、多くの方々のお力添えをいただきましたことを、心より感謝し御礼を申し上げます。

平成十一年十二月

丸本柳八

目次

はじめに	丸本 柳八
寄稿文	(株)マスコット会長 山口 勇
生い立ち	1
幼少時代	3
父の死とへび事件	9
母の米袋	13
長崎へ	17
山口紙商店社長の死	24

独立、上海へ……………28

入 隊……………34

南昌時代……………37

終 戦……………44

油屋町に創業……………48

工場第一号建設……………51

おわりに……………54

語 録 集……………56

関連記事……………64

歩 み……………74

あとがき……………80

生い立ち

(昭和四十三年社内報)

過去の五十年を振り返って記事にすることは、記録もなく思い浮んでくることをそのまゝ書き綴るので、前後したり重複したり記憶ちがいもある事と思いますが悪しからず。

私の記憶しているのは小学校一年生位からですので、それ以前の事は母・おとよ伯母さん・兄・姉に聞いたことを書くことにする。

私の生まれた所は、雲仙岳の西千々石湾を望む海岸近くで現在母が住んでいる所である。父秀男母キルの三男としてこの世に産声をあげた。兄二人姉一人弟三人妹一人の八人きょうだいである。生家はもともと網元で、回船問屋や雑貨商も営み裕福な生活をしていらしたらしい。兄の話では、天草方面から移住し千々石に土着した形跡があるらしい。

私の名前は父方の祖父にあたる柳衛と母方の祖父の八五郎の頭文字を貰って柳八と名付けたらしい。当時私の子守りだったおすえさんの話では私の生後まもなく母が長崎の下村病院（現在磨屋町）へ入院したので里子として諫早の或る所へあずけられた。ところが泣いて／＼一週間もたゝない内にとっても育てることが困難であると云って戻しに來られた。とても手をやかせたらしい。海育ちのため、浜で遊ぶのが大好きで、暗くなるまで遊んでは母によく叱られたも

のだ。泳ぐことは六つまでに覚えてしまっていた。溺れたのも二回程あり、助けてくれた人も現存しておられる。

父の思い出は無口で子供達を抱いたり可愛い言葉をかけたことはなかったが、よく漁（夕方沖へ出て朝戻る）へ連れられて行った記憶がある。又、網子達が父の前では大事にもてなしてくれるが、居ない所ではいじめられたり泣かされたものだ。そんな時、いつも影になり陽なたになって可愛いがってくれた網子達の一人、徳じいさんの顔は今でもはつきりと浮んで来る。その頃鰯の中から大きな魚を選び出して、朝我が家に持ち帰ることが楽しく得意だった。父は我が子の重そうに持っていく姿を見るのが嬉しかったのだろう、必ず後から黙ってついてきたものだ。

ボンヤリとした私の幼少時代の中で、ただ二つ程はつきりときざみつけられたエピソードがある。それは……私が三つか四つ位の時であったと思う。蛙を取りたい一念から麦の穂を口へ入れたため刺が口中にさゝり、母が驚いて抱きしめて四キロ位の道のりを走って病院へ連れていってくれた記憶がある。親の子に対する愛情が今だに身にしみる。五歳の頃であつたろう。たまたま棚の上へ置いてあつたお金を見つけ、それを持ち出しキャラメルを買いに行ったところ菓子屋のおばさんがそのお金を持って母へいゝつけに来た。それで母に叱られ昼頃から仏壇の横の押し入れにいれられたまゝ夕食まで出してくれなかった。後日わかったことだが、取っ

た金額は五十錢玉だったそうで、幼い私にはその価値を知るはずがなかった。相当の悪童であつたことは間違いないらしい。

大正十二年四月、定八叔父さんに手をひかれて、羽織はかまをつけ小学校へ入学した。その定八叔父さんも原爆のため親子六人全員他界されてしまった。この人はこれからの記事に度々出て来る人で、私が商道へ進むきっかけを作ってくれた恩人です。

幼少時代

(昭和四十三年社内報)

今回は小学一年から六年生までの記憶をたどってみます。まず最初に浮んで来るのが先生である。

神谷先生、馬場、高木、佐藤、田中、川崎、荒木の諸先生に指導していただき、校長先生は三年迄が宇野校長で、後は田中校長にかわられた。

勉強することより遊ぶことに熱心な私は、勝負事に関して人に負けることはなかった。

自慢出来るのは、八年間一日も欠席せず表彰されたことと、運動会には必ず賞をもらったこと。勉強が出来なかったことは自慢の一つだとは言えないけれども、長い人生を我々が生きて

いく上で一番大切なものが頭ではなく、心であることを感じられる現在、けっしてかつての自己の姿に劣等感をもつことはない。

その頃流行した遊びは、金のかからない健康的な方法だった。

陣取り（両軍にわかれて陣を取る）

キリコ（相手の頭に先に手をあてた方が勝ち）

打ら（メンコ）

あぶ（野球ににている）

めじろ捕り、ウナギ捕り、山こぶ捕り（クモ）、魚つり……などで捕っためじろやうなぎや山

こぶは必ず自慢話して花が咲いたものだ。

四季ごとに遊びもかわり、その遊びが田舎ならではの味わえないのである。

三方が山で、前方が海、その中心部にあるのが私達の学校である。私の家は学校から百米位下の海に近い所にある。

海、砂浜、野山、すべてが今も変りなく昔のままの思い出を残してくれている。

特に海と浜は、私を育ててくれたと言っても過言ではない。

兄達から叱られて泣いていると、母から「浜に行つて泣け」と言われ、浜に行つてしくしく泣いたものだ。母親がほうきをもち上げて叱つて来る時も、逃げ先は浜であった。

海と合流している川の石の穴でウナギを釣っている子供を見ると、かつての自己の姿を見る様な気がする。あの頃はよく釣れたものだ。ウナギ捕りのヤグラもよく作った。夕ごはんも忘れて遊んだのもあの砂浜である。丸い大きい夕日が落ちる頃まで遊び、エサを求めて飛びまわっていたカラスも集団で山の方へ帰る頃、やっと家路についた。

『夕焼けこやけで日が暮れて

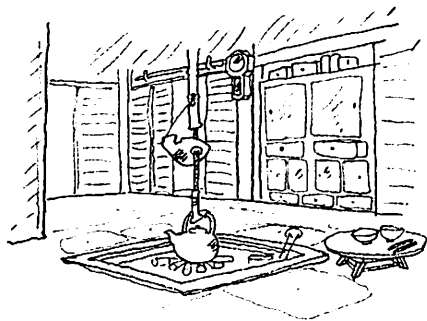
山のお寺の鐘が鳴る

お手々つないで皆、帰ろう

カラスと一緒に帰りましょう』

この歌を聞くと、幼い頃がなつかしい。小学一・二年頃迄は、おとなしく飼った猫の様だったのを覚えている。家の方もまあくで小作人からの米も積まれていたことを覚えている。父親がイロリの中に捨てるきざみたばこの粉の中から、一銭玉、二銭玉が出たものだ。それを探るのが楽しかった。親はそばで見ていてわざと入れていたのだろう。

無口な父も酒が入るとよくしゃべったものだ。職業がら酒はよく飲んでいた。半期半期の計算にはあつちこつちの酒屋から巻紙に書いた請求書が来たものだ。その頃になると、母の機嫌



が悪くなり、やつあたりされたものだ。

漁があつた月は、十五日の月夜頃には勘定があつて盛大な酒もりが行なわれた。私達子供には、小遣いが配られたので楽しかった。小学三・四年頃から不漁続き、私のおぼえるのに大きな地震があつて、諫早迄客馬車で逃げたのだが、その後急に漁がなくなつた様な感じがする。

漁師は三年不漁が続くと財産をつぶすと聞いていたが、第一回整理、第二回整理で土地も田畑も売り払つた様子、親族会議もあつたようで、兄達の諫早中学の学費さえ滞つていた状態であつたらしい。そんなことは知らないのが子供で私の身を感じ取れたのは子守のおばさんを返して弟の子守をさせられる様になつたこと、畑仕事に行く様になつたこと、米と麦の主食だったのが、はちりめし（イモ）とか、あわめしになつたこと、小遣いがなくなつたことなどであつた。どうしてそうなるのか、幼なすぎる私には知るよしもなかつた。

四年生から私のわんぱくは始まつた。唱歌（音楽）の時間は荒木先生と言つて今でも千々石におられる女の先生であつた。会うと笑つて頭を下げるがどうもテレくさい。と言うのは当時その先生のほつぺたが赤くてりんごのようだったので、歌に合せて最後にリンゴ／＼と大声で言つたところ、生徒全員が大笑いしたので、益々真赤な顔になつて職員室に戻つていかれたがそれだけですむはずがない。まもなく担任の先生に呼び出され教室に座らされた、と言う思い出があるからだ。四・五年の担任は高木先生で学校内でも一番きびしく、七節竹をいつも手に

しておられた。大変迷惑を掛けたが、今は故人となられている。

四年生の時の教室は校舎の一番端で椿の花の咲く頃は教室の横のセンダンの木に目白がよく来てさえずるので、そのまねをして叱られるし、十五分の休み時間が来ると、学校の外に飛び出して学校の下にある立派な家があつて、（ホテルと言つていたのですが）その池に目白が水あそびに来る場所があるので、そこにトリモチを木の枝に着け、仕掛けて次の時間に見に行くのである。必ずの様子に一日一羽は取れたものだ。その間の授業が身につくはずがない。たま／＼取った目白を机の中に入れていたら鳴き声で先生の耳に入り、ホテル行きの仲間が呼び出され、教壇の上で机を頭の上のせて放課後まで座つていたことを思い出す。

それから五年生の時は男女共学であつたため、女生徒をいじめている所を高木先生に見つかつて、総員十五人位が二校舎（一周一五〇米）を四つんばいになつて二回廻りさせられた。先生は得意の七節竹をもつて後からついて来るのでごまかしは出来ず、一回目はなんとか廻つたが二回目は皆フラフラで泣きごとを言うのと七節竹がピシ／＼と尻ペタに飛んで来る。一時間以上もかかつてやつと終つた時は、腹はペコ／＼で帰つた。その時の思い出は今もはっきりと頭に残っている。

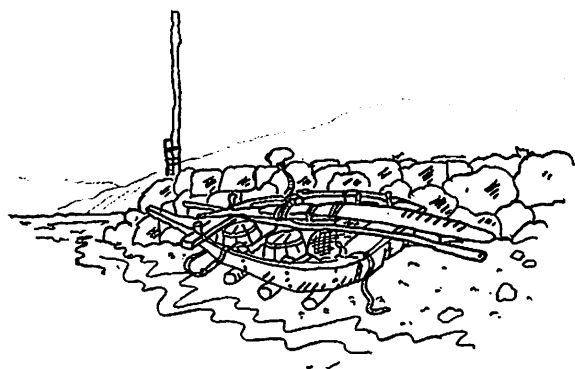
先生もてこずる位のいたずらであつたことは間違いない。学校時代の学友の思いが強く残るのは、抜群に頭の良い友か、徹底的に悪い子の二通りで、私はその後の方で、同窓生はもとよ

り、上級生にも下級生にも知られていた。

入学当時は兄弟四人が学校通いで母も大変だったと思う。母の協力者は姉で、洗濯から食事の準備までしている様だった。兄姉は優等クラスであったのに私だけは勉強嫌いで有名。いじめられるのも兄弟がかりで泣かされていた。通知表取りの日が一番嫌な時であった。

修治兄は諫早中学を卒業、智兄は諫早中学在学中、妹が三年で学校には通っていない弟が二人、そして私が六年生の時に、大黒柱である父が、常々の酒が原因で肝臓を患い床に臥した。

父のかわりに兄が手伝ったのであるが、悪い時には悪いことが重なり漁が思う様にゆかず、母と兄との言い争いがたえなくなった。我家がどん底に落ちたのもこの頃からである。学校ではクラス編成もあり、友達の中では進学する人もあった。貧しくなった家庭のことを思うと、負けてたまるかと思う根性もこの頃から、芽ばえたようである。



父の死とヘビ事件

(昭和四十四年社内報)

今回は、幼年時代の最後、六年生の終り頃から、高等科二年生（現在の中学）迄の思い出を書いてみます。

現在私が巳年生れでありながらヘビ嫌いであることは評判になっている位だが、小さい頃からそうではなく、ほとんど誰もがそうであるように、私のヘビに対する観念を大きく左右した一つの事件があったのです。それは昭和三年八月も終りの頃だったと思います。

歴史の時間に窓側に居た私はなんとなしに、外に目をやりますと、屋根の軒先に一匹のヘビが子すずめを口にくわえているのが見えました。その回りで親すずめ達は、なすすべもなくただチュウ／＼と鳴きさえずっている。そういう光景を見て先生の話しが耳にはいるはずがありません。授業が終るのをまつて鐘の合図と同時に教室を駆け出し、竹ザオでヘビをたたき落としましたが、すでに子すずめは死んでいました。

かわいそうでなりません。子すずめを殺した憎しみと、おもしろさも加わり、そのヘビを校庭中振り廻して遊んだので、ヘビは死んでしまいました。それを捨ててしまったらよかったのですが、四校時が理科の時間で川崎先生という女の先生だったので、おどろかそうと思い、そ

のへびを理科室の試験管にわるくろ友達馬場君と二人で丁寧につめこみ、教卓のひきだしに入れ、そしらぬ顔でいると、まもなく先生が来られ、級長（委員長）の「礼」と言う号令で先生もまた頭を下げられました。それまでは計画通りうまく進んだので内心ニヤニヤとしていたのですが、頭を下げると同時に真青な顔になって、一目散に職員室へ走ってゆかれたのです。その時の足音がけたたましく、今でも耳の奥であの音が聞えて来るようです。

その瞬間「しまった、悪いことをした、大変なことをした」と思った時はおそく、担任の佐藤先生が目玉をクルクルさせながら入って来られ、へびを指さして「これをした者は出てこい」と言われたので、馬場君に合図して前に出ると「ほかは皆な自習しておけ、二人はついて来い」と言われて職員室を通って校長室へ連れていかれました。校長先生というのは、当時、生徒達にとっては天皇陛下の次ぐくらいに偉い人だと思っていたのですから大変です。

身体中がガタガタ震え出して止まらない。馬場君は泣き出す始末です。田中校長と橋本教頭が私達の前に来て、板張に座らせ「今君達の親を呼びに行ってるから親に話して明日から退校させる」とまじめな顔で言われるので子供心に本当に思い、とうとう私も泣き出してしまいました。昼食もせずに座っていると、二時間位して佐藤先生がはいってこられ「おれから校長先生に退校させぬように頼んでやるから、けして二度とこんな悪い事はしないか」と言われ、泣きながら頭を下げて頼んだ記憶を忘れることができない。それから、へびのたたりか、話を聞

くだけでも身震いする様になった。このヘビ事件は現在にいたるまで母は知っていない。

昭和四年三月、六ヶ年の義務教育を終り、私達は小学高等科へ進んだが、裕富家庭の者、又優秀なる同窓生六名は中学校（現在の高校）へ進み、貧しい者、家庭の都合ある者四名は蛍の光の歌で送られてそれぞれに去っていった。

桜の花も散り去った四月二十九日我家に最悪の時が来た。それは父の死であった。その朝九時の天長節の式に出るため姉に羽織、はかまを着付けしてもらい出掛ける準備をしていると、家の様子がいつもと違う感じをうける。父の病状が変わったと聞いた。納戸（父母の寝室）にいる母と横田のお婆（父の姉）が異様な顔付で父の枕元に座ったままにいる。子供ながらも気にしながら登校した。

式が始まって間もなく女の先生が私の手を引いて黙って外に出た。父の病気が悪いからすぐ帰るように電話があったとのこと。「やつぱりそうか……。」予期していたことであったが、先生の言葉を聞きながら私は『死』という未知の世界に対する不安に押し流されていた……。

どのようにして家に帰ったか覚えていない。納戸に走りこむと、多くの親戚の人々の顔があった。横田のお婆が父の手を取って仏の教えを涙を流して話している。後で姉に聞いたら、往生安樂する様に話したとのことであった。十一時頃、父は他界の人となった。病因は肝硬変であった。兄は諫早中学であったのでまにあわず、十二時頃帰って来たが、父の死を知ると残念

がつて階段の所で泣いていた。

その悲しみが私には実感として湧いていなかったが、今こうして文に綴る時、今迄 母のうに元気で生きていてくれたらと思う時、つくづく淋しさと悲しみが胸にこみあげて来る。私はすでに父より六年も長く生き、自分も父のように去って行く日を思うと、子供も私の父と別れた時のような状態を味わうことと思うと人間のみじかい一生が、ヒシヒシと胸をしめつけて来る。

父が亡くなると、第三回の負債整理があった。親族会議があり田畑、宅地を渡して綱引の権利も譲渡したようであった。

「先祖のおかげで渡す財産があったから人様に迷惑かけず、今でも大きな顔ができる」と思いつ出したように今でも母は話すのである。

父の死とヘビ事件で、私の幼心も心の眼が開いたと言っても過言ではないと思う。学校から帰ると子守りをし、母のため少しでも手伝えることは進んでした。

真夏の太陽の下で夏休み中、畑の草刈り、はちり（いも）のツラ起し、にぼしの製造と……いろいろな加勢したものだ。

このころから私の将来への夢も芽ばえて来た。小学高等科一年（中学一年）の頃から、電気学校へ行きたくて、東京のおじに手紙まで出したことを覚えている。しかしそれはかなわぬこ

とがわかると、次に鉄道員になりたくて講義録など取り寄せたこともあった。

いろいろな夢が次から次へと湧いて来たが、先立つものは金である。十三歳の私にはなすべきすべがなかった。兄達は私の将来にはかまってくれなかったし、一人の姉は長崎に行ってしまったし、一人で悩んだものだ。

昭和六年三月二十日、総員六十三名希望に胸ふくらませ卒業した。半数近くの学友は、小鳥が巣を飛びたつように故郷を後にして都会へ行った。田中登先生のお知恵でこの後の同窓会を「六十三会」と名付けた。

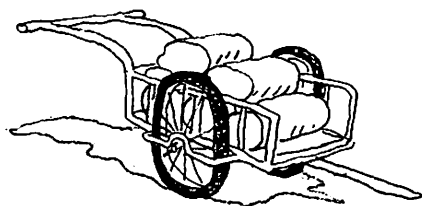
私は家の都合で残った。

この高等科における二年間は、私にとって内面的な成長の発芽期であったといえよう。

母の米袋

(昭和四十四年社内報)

早いもので私の回顧録も二年前の第二号より書き出し、もう四回目となった訳です。前回と同様、今回も少年期が続く訳ですが、ただ少し今迄と違って来る事は、高等小学校(八年間)



を卒業して、新しく未知の社会へ第一歩を踏み入れ、其処でぶつかつた多くの壁に対して、その時点において自分なりに真剣に考え行動して行つた時期と言えることです。

記憶にある世情は、総理大臣に変動が激しく、浜口首相の狙撃、後、若槻首相、犬養首相と一年間で三人の首相が出現したことは、史上初めてのことでした。今、思い出してみると、その時分から大東亜戦争の間違つた方向へ進みつつあつた時だつたように思えます。政治の中に軍の圧力が侵入し軍国主義国家になつたのもこの当時からのような気がします。そしてこの年（昭和六年）七月には、満州事変が勃発し、日本は深い泥沼の中へ次第に落ち込んで行つたのです。

田舎の貧困な生活も――米の不作――絹糸の値下り――で更に深刻になってきました。我家も絹糸になる養蚕をやつていたので、当時のことを思うとその苦しさが身をもつて思ひおこすことができます。姉と二人で桑の葉を畑に摘取りに行くことが日課で、晴れた日はともかく雨の日などは、はじめな気持で葉を取りに行き自分が濡れたのはかまわず、まず先に濡れた葉を家中に干して、乾いた葉から蚕に与えた記憶も遠い昔の思い出として残っています。

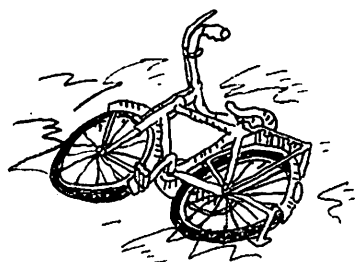
母と姉と妹弟二人、家族六人の生活でした。兄二人は満州に出た後だったので、卒業するとすぐ母の手助けをしなければなりません。然しその義務は私にとつてけつして嫌なものではなく、当然の成りゆきとして素直に受け入れることができましたが、生活の方は一向に楽

にならず、春蚕の繭玉を諫早まで運んで売っても諸経費を差し引くと赤字であつたことを覚えていました。私は幼心に「家はどうなるのか」「このままではいけない。働いて錢を稼ごう」などと夢中に考えました。

春蚕が終ると同時に、姉は長崎へ女中奉公に出ていきました。私と母は畑をやる一方、草履作りをし、その日／＼の生活を送っていました。そんな時、母の祖父がやって来ていきなり「一かめご（竹籠を前と後につり、天秤棒で肩につる）をして働かせろ。商人は飯の食い損はないから今日からでもさせろ」と強く母に言っているのです。親戚は父方も母方も景氣がよく、村内でも『長者番付』には十番内にはいる連中ばかりでしたので、母親の気持ちは尚更のこと苦しく、どんなに肩身がせまい思いをしただろうかと思えます。親戚には負けてはならない！必ずこの母親を喜ばせてやりたい！と真剣に考えるようになったのもこの時からでした。

それから間もなくして、親戚の家（母の弟）から手伝いに来てくれとのこと、早速住込みとなつて働くことになり、まず第一に自転車乗りの稽古をして、一週間位で使い走りもできる様になり、隣村までも行くようになりました。農産物の売買とか肥料の販売だったので、運搬は馬車でやり自転車で行くのは連絡事項の伝達にすぎませんでした。けれども親戚であるため他人と違った神経を始終使っていなければなりません。七月も半ば過ぎ、京泊（小浜の先）迄行つて集金してくる言われたので、翌日早朝から出発しました。京泊は母の妹の

家であるため、会えるのが楽しく自転車は快調に走り三時間位で着きました。御飯を頂戴し、集金した分を腹巻に括りつけて帰路についたまではよかったのです。小浜の町を過ぎ、登り坂は自転車から降りてやつの思いで木場の峠まで着きました。流れる汗を拭き、岩から湧き出る清水で喉を潤し、やっと一息つきました。これからは下り道と言う重労働の解放感から口笛を吹き乍ら、自転車に乗り下り出しました。あまり気を緩めたせいか、スピードを出しすぎたせいか、一寸ハンドルを取られたはずみに道路ぞいの畑に横転してしまったのです。畑の中で自転車の下敷きになり、まず最初に頭に浮んだことは、自転車は壊れていないかの心配でした。幸いペダルの部分が曲がっただけであることがわかりホッとしたものでした。その当時自転車は貴重な品で、それも私のため新車を入れたばかりだったので、もし壊してもしたらそれは大変なことだったのです。体の方のケガは右腕の皮を石ころで10 cm位かすり切っているだけでした。店の方には帰る気がせず、我家に帰ってしまいました。母の顔を見ることは大きなぐさめでした。自転車と集金した分は母に頼んでもって行きました。私は傷が治るまで養生することになりました。今思うと行けないわけでもなかったのだが、叔父の家で働くのに嫌気がさしていたので、そのケガは良い口上になったと思つてます。遊びながら五日程過ぎたある日、隣で魚屋をしている私より一つ



年上の友達、小崎季人（故人）がやって来て、今から魚を取りに行くから、長崎に行くのだったら連れて行くとのこと、とっさのことにまごついたが、気はくさっている時だし、親戚に居ても金は思う様に手に入らないし、長崎で働くことに決心しました。

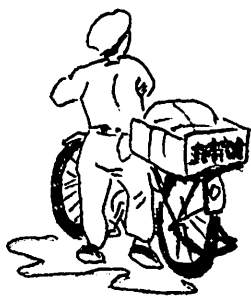
こうして私の長崎での生活が始まるのですが、それこそ着の身、着のままと言う言葉がぴたりあてはまる出発でした。半ズボン、半袖シャツ、すりへった下駄、小遣いなどあるはずがなく、母が大事に保管していた白米を三升ほどメリケン袋（粉を入れる木綿袋）に入れると、「柳八、これば持って、籠町のおばさんの所へ行け。そこに泊めてもらて、働き先ば探せ。こん米はおばさんにお礼にやれよー」と言つて、私に袋を渡した。その当時米御飯を食べることは、お祭りか法事以外にはなく、私にとってただ一つの財産であつたのです。

長崎へ

（昭和四十五年社内報）

私の長崎への第一歩が印されたのは、新地の赤レンガ倉庫の裏通

りでした。そこは母の親戚にあたる人ですが、突然の珍客におばさんも驚いた様子でした。季人君が千々石へ帰る時は、さすがに心細く淋しく思ったのと同時に「これからは何をするにも



一人だ」と言う自覚で緊張するのを感じました。

早速、翌日から働き先を探しました。従兄が鍛冶屋町の森崎家具店に務めており、その人の世話で八幡町の菊政酒店で働くことになりました。『店員入用』と店頭に下げたある札を見て申し込んだものでした。本当の酒屋の小僧です。朝は五時半に起き、四斗樽から上中下の階級を作るため、真酒を抜取って水と入替るのです。その後掃除をし、朝食が済むと注文取り、午後には配達で一日が過ぎる。容器の徳利を紐と紐とで結びつけ肩にかけ、十本位を手にもって伊良林一帯を廻ったものでした。初めて、給料五円をもらった時の喜び、自分の力で得た最初のお金でした。早速その一部で郷里の弟達に本を送ってやりました。

辛かったのは年末の徳利洗いでした。五、六十本を毎日凍りつくような水で洗い、最後の頃には手先の感覚がなくなるほどでした。

菊政には昭和六年八月から翌年四月迄勤めて山口紙商店に移りました。そして私の生涯の職業はここから始まったのです。

菊政酒店を退職するにあたり、ちょっとしたエピソードがあつたので、そのことについて今回は記すことにする。

昭和七年四月、菊政酒店につとめるようになり、十ヶ月がたった。やっと一通り仕事の内容もわかり、人手不足の折、貴重な存在として、あつかってくれるようになった時だっただけに、

子供の私には、やめることを申しでるのが非常に辛く、又、申し出ても店員は一人だし、断わられるのは明らかであつた。そうしている内にも時がたち、山口紙商店に務めている同郷の江川君からは、早く来るようにと矢の催促で、来ないのなら他にも居るから、そちらを入れるとのこと。気をもんだあげく十五歳の私は、千々石の郷里から「母が病氣だからすぐ帰れ」と言うウソの電報を打つてもらうことを考えついた。今にして思えば、すぐにでも暴露してしまうことはまちがいのない浅知恵であつたのだが、当時の私にとっては、それが最高の手段だと思つたのだろう。そのウソはまずは計算通り成功したかのように思えた。その電報を受け取つた菊政の主人は、心配し、すぐに見舞として、カステラ三斤と小遣いとして一円を渡し、帰るように言ってくれた。私はそれをもつて親戚の家へ行き、姉を呼んで見舞にもらつたカステラを開いた。途中で気付いて追つかけてはこないだろうかと言う不安から解放され、やっと落ち着きだすと同時に、それまで、計画が成功したことで胸が一杯だったのが、自分の行為に対する良心の呵責のようなもので胸が一杯になり、その時食べたカステラはけつしてうまいものではなかつた。翌日山口紙商店にはいり、菊政において来た衣類と荷物をその夜、裏口からお手伝いの高石さんに持出してもらつた。その時の恐ろしかったこと。見つかったら、何と言おうか、どうやって逃げようか、そんなことばかりを、動揺する中で考えていた。その時の高石さんこそ、今の社員の高石君のおばさんであつたことも何かの因縁であろう。今でも会うとその話し

がでる。

山口紙商店にはいり、四日間が過ぎた。新しい生活にもどうにか慣れた時、配達先で、菊政の主人にバッタリ会い、うまく行つたと思つた計画もばれてしまった。早速、老主人が山口紙商店に乘込んで来て、山口の主人にかえすように交渉しているのを聞き、驚いたことだ。そんなに見込まれていたかと思うと嬉しくもあつたが、今更、菊政に戻る気にもなれず、又、山口の主人も返事に困り大学に居た中村定八おじさんに来てもらうことになつた。おじさんを通し、菊政の老主人にあやまってもらい、どうか話しがついたのである。この時ついたウソこそ、今までの私の最高のウソであり、一番にがい思い出であつた。

このような複雑ないきがかかりで入社した山口紙商店であつただけに、腰が座り、ここで約七年間つとめた。

合資会社山口紙商店は、長崎市材木町二六番地（現在の賑町にある）（株）山口紙商店である）にあつて資本金千円で社長山口喜智朗四十二歳、主な販売商品は洋紙和紙、マッチ等で県下ではこの業者間で一位をなしていた。社長は温厚な人柄で、商人というより学者肌の人で、長崎高商を卒業され、趣味は俳句、画、花壇いじり、山登り等。知名士として広く知られていた。私が七年も勤務出来たのも社長の人柄に惚れたからである。よくかわいがってもらつたものだ。

入社当時、社員は十年生の赤司、七年生の松永、六年生の井上、四年生の前田と金さん、三

年生の茂さん、千さん、二年生の春さん、清さん、勇さん、実ちゃん、私を入れて十二人、他に炊事をしている女中二人で、社長の家族が奥さん、男の子四人で計六人、以上二十名が毎日顔をあわせる人達であった。

赤司、松永、前田の三人は妻帯者で通勤である。住込で古参の井上は、二階の商品置場ではあるが古く趣きのある部屋であった。外は三階といつても屋根裏で梁と梁の間に部屋を作つてあつた。年功順によい部屋から分けてある。私にあたえられた部屋は一番奥の一段さがつた二畳の間仕切のしてある所が我住家と決められた。八人が寝ている屋根裏は階段は一ヶ所、五十糎幅位で火事でもあつたらどうなつていたことだろうと思ひ出すとぞつとする。

朝六時半にこの階段を下りると夜の九時迄はあがつてこないのである。ねるだけの部屋である。九時から朝の六時半迄が自由であり、自分だけの時間である。一日の疲れで畳の上にすわつた時の喜び、うす暗い電灯の下で母や兄弟からの手紙をよんだり、書いたり、姉からもらつて来た菓子等一人で味わいながらたべる時の喜び、苦勞が多ければ多い程、楽しさも深いのであつた。

一年生の終日の仕事は六時半起床、一人ひとりの朝仕事があつて倉庫の商品の整頓である。古参になると神棚の花水を替えたり、事務所の机の整理等である。社長と奥様に朝のあいさつをすまして、朝食して店を開けるのが八時であつた。一年位は車引で終ると聞いたものであつ

た。自転車で配達することをどんなにあこがれたものか、自転車で行く先輩を見てあんな身分に何時なれるのか、うらやましく思ったものだった。

二年間近くは苦労だけで、なに一つ楽しみがなかった。今ふりかえって見る時、その苦労の積重ねが人間を作りあげた基礎ともなったのかと思うと、遠い昔のよき思い出として大事にして残しておきたいと思うと同時に、そのなつかしさがこみあげてくるのである。

昭和七年（十五歳）、世の中は満州事変とか五・一五事件が続いて起き、政党政治が終りを告げていた。そして軍の力が強くなり出し非常に不安定な時代であった。

山口紙商店に入社し、私も一年を迎えた四月、後輩が入社してきた。後輩の入社したことにより私の前進もあった。朝の仕事の靴磨き、掃き掃除も申し送ったので、起床も二十分遅くなり楽になる。嬉しさ一杯であった。仕事の状態も変わり、命じられたのが第二倉庫の整理係と配達雑務である。そうになると、一年生の時より、責任も重くなってきた。しかしそれだけにやりがいもあり仕事にも興味を持ち出した。給料も六円から八円に昇給し、小遣いにもゆとりが出た。社内には、千々石出身と諫早出身の派閥もあり、それらが目にとまり、故郷の者同志は仕事の面でも、団結したものだだった。

入社して三年位になると、お客と接する様になり、配達から、注文とり（外交）に対する感覚を覚えたのも、十六歳の頃からであった。その頃、店の主人は花栽培に興味を持っておられ

たが、私を気にいられてか、よく屋上の花だんに一緒に水掛けをしたり手入れをした。日曜日には、西山三丁目にあった花畑に行つて、除草、施肥春先には種まき、ダリヤの球根の植付け等をした。花の種類も多く睡蓮、すみれ、チューリップ、菊、ダリヤ、あらゆる花を植えていた畑のまわりはコスモスで、秋になると西山へ行くのが楽しみの一つであつた。そのせいか、山登りもよくやつた。長崎周辺の山をかたつぱしから登つた。

十七歳頃になると私も一人前、初恋らしいものをした。それも遠い親戚で、住まいが伊良林にあつたせいか、西山から帰る途中花を持ってよく遊びに行った。それもきれいな花から渡してきたものだつた。彼女はやせ型ですんなりとして、パチリとした目――。女性とつきあつたことのない私にとっては、すばらしく美人にうつつた。どちらかという私の想いの方が強かつたようだ。そうなると月二回の休みが待ちどおしくて、必ず遊びに行き、おばさんにも御世話になつた。山登りをしたり、映画を見に行つたり、ただし、映画だけはおばさんが御目付役で付添つてきたが……。それでも私は楽しくてたまらなかつた。彼女には父親がなく、母と妹と三人暮しで、楽な生活でなかつたらしい。彼女にとって最悪の不幸がきたのは昭和九年十月であつた。病気で入院したのだ。胸の病気で、今ならば医学も進歩し、よい方法もあつたがその頃はこの病氣にかかるとうくなる人が多かつた。彼女も普段からやせ型であつたが、ますますやつれてゆき、全快の見込みがなかつた。私はあいかわらず花を持って見舞いに行つたが、

翌年の三月みじかい命でこの世を去った。

毎日楽しく張切ってやっていた仕事にも張りが抜けて、力のない嫌な日が続いたものだった。コスモスの花を見る度、彼女のありし日がかんてくる。かれんなかれんなすんなりとした姿が似ているから。

市川初枝嬢の死は生涯私の心に残ると思う。初恋とこれが言えるかどうか知らないが、親しい女友達を失くし、私の心境も一步前進したようだ。女性に対する見かたも、又、前進したと思う。

山口紙商店社長の死

(昭和四十八年社内報)

昭和十年、十八歳を迎え、山口紙商店に入社して満四年になる。先輩顔が出来るようになったのもこの頃からである。懐しい屋根裏生活と別れを告げ、二階の部屋に移った。朝起きて、新聞を販売台の上にひろげて見る位で朝食となる。住み込みでは最古参者であるが故に、妻帯者の出社迄は我天下だったわけだ。食事が済み仕事に出掛る頃、先輩が出社、自転車で集金、外交の一日が始まるのである。

商いのおもしろさが身についたのも、この頃である。年をとることが待ち遠しく、他人から老けて見られるのに、うれしく好意を感じたのも、十八歳から二十歳位迄。さほどの苦勞もなく、すい／＼と仕事がうまく運ぶことが喜びで、毎日が楽しく、小間紙類の仕入もするようになり、出張員との折衝をする機会もふえてきた。

給料も二十五円になり、当時、チャンポン五十銭、コーヒー十五銭位の時だから、小遣錢にも不自由なく、結構遊んだものだ。

そうなつて来ると、つい夜のちまたに、足が向くようになる。

初めて丸山、寄合町を知ったのも、十九歳だから一寸早いかな。忘れもしないある日大村の山口印刷所の社長が来社し、仕入支払が済んだ後、「柳さん、カフェー（キャバレー）に行くからついて来い」と言われ、都合よく先輩は帰った後だし、相手がお得意さんでもあることなのでこれに応じた。

思案橋を渡つて、福砂屋迄来ると右がカフェー街であるのに、左へ行く。なんだ、丸山行きである怖さ半分、好奇心半分。ままよ、山口さんの言うことに従つた。こういう思い出である。当時の思案橋は今の十八銀行の隣に時計屋があつて、その先から向側の花屋迄の間に橋が掛つていた。橋のたもとに、柳の木もあつて、流れている水は清流であつたことを記憶している。時計屋の前が電車の終点で、二階建の洋風館の建物で電車はその建物の中で乗り降りができる

ようになっていた。入口の左側が川口鼈甲店で、店員の福島君とは同窓生で暇があると二階「食堂あかつき」で遊んだものである。あの時の、あの娘はどうしているか、つい十九歳の頃が懐しくなって来る。昭和十一年も終り近い十月だった。若さいっぱい楽しさいっぱいの青年の心にぐっと引締められた事件が二つ、それも同時に、沸き起こってきた。

それは山口紙商店の私の最も信頼と尊敬をしていた社長の病氣重体と、満州にいた兄修治の病氣のため、いかに計るべきかである。十九歳の私の前途に波乱が巻き起る予感を感じつつ、昭和十一年も暮れようとしていた。

昭和十一年の世情は、近衛内閣のもとで日々軍事勢力がエスカレートし政治家暗殺の二・二六事件の年でもありました。

狭い日本に住み飽き、海の彼方に支那（中国）がある。「支那には四億の民が待つ……」の歌の通り、国民は広い広い中国へと働く場を求めて渡って行った。

今、思うと、すでに昭和の初め頃から、中国への侵略が計画されていたようである。

その海外進出の名のもとに、私達兄弟八人の内、四人が当時の満州に渡っていく。故里に残っているのは、母親と弟三人であった。

母の苦しみも生涯で最高であつたろう。満州の兄弟からの援助はなく、残りわずかの土地は、手離したくない母の執念である。

私のわずかな給金からの援助は「焼石に水」。よく無収入で、八人が育ったものと、今もつて、母に頭が下る。丁度この苦況の折、関東庁に勤務していた修治兄が、病気の為長期欠勤するとの連絡である。内地に呼び戻して養生する事に決まり、私が迎えに行く事になった。

十九歳の私にとっては大きな仕事である。早速岡政デパートの三階洋服部（当時岡政は木造三階建）で、三揃の背広を（八円位だったと思う）買求めて、母が大事に守って来た土地の一部三〇坪を処分した金を腹帯に巻いて、長崎の出島を出たのが十月二十日頃であった。

淡路丸（八百屯位）で二泊三日で大連に着いた。その時の思い出がある。船の中で知り合った、大連育ちの若い女性と友達になり、長い旅も短く感じた。

上陸すると大連の町を見物に案内してもらい、星ヶ浦公園で昼食を御馳走になった。帰りは是非立寄る約束で別れたが、病人連れであった為だめになった。残念な事をしたものだ。帰りの船は千歳丸で玄海灘の大波にあい、このまま海の中に沈むのでは？と心配した。おまけに病人にはさんざん手を取られるし「行きは極楽、帰りは地獄」と言う言葉に当てはまるような光景だった。帰崎後兄は大学病院に入院し診断の結果、脊髄カリエスと判断された。（長い闘病の末、昭和十九年三十歳の若さで去って行った。）

山口紙商店の社長の病状も、増々悪化して福岡の大学病院に入院していて、私が見舞に行つた十一年十二月初旬最後の別れとなった。別れの水を差し上げたのも、私と他何人かの人であ

った。

手を取って別れをしたのも何かの知らせであつたろう。

その時私は、退社を決心したのです。帰りの霊柩車の中で、山口の将来、自分の今後の事を考えて独立の精神に燃えたのも、この時からである。

明けて十二年の四月は国民の義務である徴兵検査を済ませ社会人としての一步を踏み出した。

独立、上海へ

(昭和四十九年社内報)

昭和十二年七月七日、北支那蘆溝橋事件発生。八月中支那上海にて、日華兩軍の衝突、日本軍^{ウイソン}吳淞上陸、大場鎮陥落と事変はエスカレートし、中国一円が戦火に包まれて皇軍の行くところ敵なしの合言葉みたいに進撃の毎日であつた。大場鎮陥落間もない十月頃より、長崎から上海に渡つてゆく軍相手の商人^{アキンド}がめだつてきた。

当時長崎から上海迄二十四時間を上海丸、長崎丸の二隻の汽船が毎日渡航していた。長崎から神戸迄十二時間、東京に行くより近くて便利なため長崎人の進出は特にめだち長崎県上海市などと言つた位だつた。その頃私にも親戚の藤島さんから「上海市内に軍隊が多いため食糧が

充分でないのと、甘味類が不足して羽根がついたように売れ人手不足で困っている至急来てくれ”との連絡があった。

私、七年も山口紙商店に住みついて簡単に退社するのも後髪を引かれる思いではあったが、兵役甲種で合格し、扁平足のため第一補充になり召集される心配もないし、山口前社長の亡くなった時点で独立は心に決めていたので”よし上海で店を出す足がかりとしよう”と加勢することを引き受け、満二十歳で山口紙商店の屋根裏生活と別れることになった。

早速渡航手続をすることにしたが非常にうるさく警察証明、税関憲兵の検査と一か月かかり、手続完了したのが十二月初め出発は十二月六日船は上海丸と決まった。多くの人に見送られ（その中に故人となられた人も多い）正午、ドラの音と共に出島岸壁を離れ、七日正午上海の揚樹浦ヤンジュツポワイサンマトに着いた。

同時に驚くことは見渡す限り一面が焼野原で輸送は軍隊の自動車だけで、中国人はほとんど見えず軍人ばかりだった。

顔がこわばる様な感じがし今日からどうしていくのか不安な気さえ起きてきた。目的地福昌洋行は五キロ位あるとのこと徒歩で三十分位かかった。

親戚のおじさんと挨拶を交わし早速仕事にかかる。商品はサイダー、缶詰、羊羹類で、日本から来た商品をワイサンマトで引取ってそれを中国独特の木製一輪車に積んで軍人相手の小売

店に売り込んで行くのが私の日常の仕事であつた。

福昌に四月迄世話になり一応日本街（虹口）^{ホンキョウ}の地理もわかり故里の福島、浜内、宮崎の友人も出来、私本来の紙販売についての市場調査の結果、ちり紙、包装紙（S・色ロール）、紙袋なら必要にせまっていることがわかり販売先も二、三決まったので、四月に山口紙商店の主人（故山口吉広）と会うことにした。

その目的は上海在住の日本人に知られている山口紙商店上海出張所の看板をもらうためであつた。そのため税関に見つかると没収される麻雀パイ、ドイツ製二眼レフを上海丸のボーイ長と話し合つて手に入れ、土産としてやった。これが功を奏したのか協議の末OKをもらった。ここまできると元氣百倍、次は袋の発送依頼を先輩の松永氏に頼んで早速全面協力。故人となられた松永氏には大変御世話になり、私にとって大恩人の一人に数えております。（私達の結婚も松永夫妻の協力のおかげである）後日松永氏の話はすることにして、ちり紙包装紙類は山口紙商店から袋類は松永氏からと仕入面の手配はできたものの、家の改造、運賃等、先に必要な資金は手元にゼロである。故里に帰り、元々商人で一代で資産を築いた祖父（中村八五郎 母親の父で当時六十五歳位）に必要な資金千円を金利日歩二銭（年利七％）借用証入れて登記役場に同行し公証を付けて貸してもらつた。

当時の千円でちり紙二〇〇〇枚として七十五銭ですから一三〇〇分現在が五〇〇円だから七

十万円位に相当する大金を貸してもらった。『学問なんか役には立たん』と我が子の大学に行くのを反対する人だから、学校もゆかず丁稚から独立して商人になるという私を気に入って貸してくれたと思う。

山口紙商店と松永氏に払えるだけ払って残は掛仕入としてトラック三台分位を船に積込んだ。この時松永氏から貰ったリヤカーが非常に役に立った。

上海進出の第一歩を嘉興路三徳坊でレンガ造りの二階建延三十坪位の家でスタートした。

上海はどんな所か、簡単に知っているだけを書いてみよう。

イギリスが清朝との間に紛争を起し、遂には広東でアヘン戦争となり、中国を屈服させ廈門、福州、寧波の四港と上海を貿易港として開港することに成功した。

南支那から中支那にイギリスは侵略の手を伸ばし、一八四五年清朝と交渉して租借地を作った。

これが上海における外国租界のはじまりである。

米、仏は、英国にならって租界を作り、後米英の両租界は合併して共同租界となり、中国人を奴隷同様にした政策が開始された。

それから数回にわたる動乱、暴動が続いたのである。

日本人が移住するようになったのは、徳川幕府が鎖国令を解いた後からであり、日本租界も

また、^{ホンキヌウ}“虹口”と呼ばれる蘇州河の以北から^{コウホウコウ}黄浦江に沿い^{ヤンジュユボ}揚樹浦の東端まで出来た。

揚子江の本流から黄浦江の支流を上りつめた所が上海で、黄浦江を境にして川向うが仏租界、共同租界で橋手前が日本租界（虹口）である、とりもつ有名な橋が歌にもある“ガーデンブリッジ”で日本海軍陸戦隊の歩哨と英国歩哨とがにらみつけているかのように立っていたのを覚えてゐる。

上海に来て、私を驚かせたことは共同租界の道路、建物、下水設備の他、内地には見られなかった“シグナル”がすでに見受けられたことだった。

二階建ての無軌道電車、当時の先進国、英米仏が百数十年前から完成していたのだから驚くほかない見事な文化都市であったことを思い出す。

たまたま長崎に帰って来た時、屋根が道路におおいかぶさって建物が頭につかえる思いをした。

それにくらべ、日本人街、中国人街とは雲泥の差である。外国租界は戦災にはあわず平常通りの生活をしているのに、橋手前の中国人街は満足な家もない位に、空爆や砲弾でめちゃめちゃに壊れていた。

話によると日本軍の爆撃も外国租界に一発でも打ちこんだら国際問題になると、相当の苦勞があつた様子だった。

夜の外人租界は一晚中、金さえあれば、女、酒、賭博、何一つ不自由なしの別天地である。

日本軍は租界への出入りは禁止されているので、行けるのは私達一般人だけであった。

二十四階建「ブロードウェイマンション」総大理石のアスターハウスを横に見つめて、ガーデンブリッジを渡って行く時の楽しさ、夜がふけるのを忘れて遊んだものだ。

当時二十二歳だから私も一寸早熟だったかな……？

仏租界に行くと、犬の競技、白球を片手で投げあうハイアイラ、世界各国から集まった美女の群。一寸と路地に入り込むと若者の喜ぶ最高の遊び場があり、帰りは素裸にされて、夜中の十二時迄に仏租界を越えて共同租界に這入ってほっとするのである。

なぜなら、仏警察に見つかりと一晚中留置場に入れられて、日本領事館に引き渡されて大変なことになる。

私もよく境界線である夜のスマーロを共同租界地迄走った一人である。

日本租界に入ると、真暗で乗物といったら、人力車（ワンポーツ）で我が家につくのが一時過ぎだった。

日本人街での遊び場所は、呉淞路^{ウイソンロ}、チャップロ^{シセンロ}、四川路^{シセンロ}で、我々居留民は遊びにいつでも軍人の権力下で小さくなって、すみの方で女性の手にふれるのもおそろくであった。

入 隊

(昭和四十九年社内報)

いよいよ私の人生流転の第一歩が始まるのですが、上海で紙屋を開いて生涯過ごす決心であったのに予想通りゆかないのが世の習いである。

店もやっと軍隊への納入資格もとれ、上海の購買組合の納入も出来、月々売上も伸びてやりがいのある日々を送った。

二十二歳になった昭和十四年戦火も南京陥落から蕉湖、安慶、九江、漢口と奥地に進展していた。上海は物資補給基地として、活気がみなぎっていた。うまく便乗した商人は一躍財を成した者もある。私などは気が小さく、正直者で財を成すなどできなかったが、けっこう遊ぶのに不自由はなかった。

男の一人暮らしは当然求めるものは、夜の酒場で一日の稼ぎを一夜にして使い果した。それが毎夜毎夜だから大変だ。朝は八時から仕事に精出した。よく遊びよく働いたのもこの頃である。やっと居留民の方々にも知ってもらい、店の格好も出来た。中国人の阿媽あま(女中)と配達夫と三人暮らしになった。電話もやっと取り付けて嫁でもと思ってる矢先、教育召集令状が舞い込んで来た。

入隊が十二月十日、場所福岡県甘木市高射砲隊、三ヶ月で除隊すれば当然三月十日であるが、戦闘は増々激しくなり、中国全土に広がっている時、とても除隊など望めない。

友人、知人もそれに同意するし、除隊できず戦闘部隊編入となればとうてい一年二年で帰れない。となればやっと軌道に乗った店舗の始末を考えねばならない。閉鎖すれば負債が残る。二十二歳の年で夜も寝ずに考えたものだった。

入隊まで四ヶ月位ある。その間山口紙商店での後輩で兄弟のようにしていた丸山君に山口を退社してきてもらった。

三ヶ月で除隊することが決っておれば、丸山君を中心にして友人等の協力でなんとか切り抜ける方法もあったのだが……とても除隊出来ないのが90%であった。とすれば山口紙商店に譲るか、だれかに売り渡すか、二つに一つを取る方法以外にない。

その時松永さんのお声がかかって、前田さん（現在前田紙店）に売り渡したらとの話があった。前田さんとは山口紙商店で非常にかわいがってもらい、親しくしていた関係で直接電話を試してみた。

妻子のある体、なかなか返答がこない。私もしびれをきらして長崎に向いて、松永さん、前田さん三人で一晩中深刻な話し合いをして、奥さんの返事次第となった。

やっと十月中旬頃だった。前田さんの決心がついたのだ。

借金の千円と商品買掛金五百五拾円位と記憶している。店舗から商品、従業員、電話総てを、毫千六百円で売渡した。借金一切支払って手元に残った金が拾円そこらだった。

母親に心配掛けたくないし、店を売却したのも隠していた。

兵隊をすましたら、又上海で店は出来るのだから金に不自由はしないと安心させて入隊したのである。

十二月五日上海ワイサンマトで多くの人に見送られ、数十本ののぼりを長崎丸の左舷に翻しながら皆と別れ、中国をあとにした。

ひよっとするとこれが最後になるのかわからないので見送ってくれる人も真剣でハンカチで涙を拭く女性も何人かみえた。

十二月十日無事入隊、月六円で朝五時三十分起床、一日中お国の為に務めたものだ。十五年三月十日に決まった通りに除隊の通知を手にした。運命の別れ道はここからくるのである。

あれ程、考え抜いたのに、的中しなかったのである。

私の生涯で丸裸になったのが数回あったとすればこの時が第一回であろう。

軍隊の月給三ヶ月分で拾八円貰った内九円五十銭貯金していたことを、いまだに忘れない。

さあ大変だ、おふくろに金がないことをいいたくもなし、上海に行くのに十五円位の片道運賃が必要だったと思う。

福島君、浜内君に電報打って十円程送金してもらった。この時程友情の尊さが身にしてみたことはなかった。帰りは門司から大連、青島経由で上海へ再び渡った。

大連経由した理由は、学校を出た弟を大連の兄の所に送り届けるためである。今でも弟に請求されるが、その時弟が貰った銭別を私が費用に使い果したので、くやしかったらしい。

上海に上陸した時忘れもしない目のあいた五銭玉一枚が残っていた。友人の出迎えに涙流してよろこんだのもこの時であった。

宮崎君（現在岡政勤務）の社宅に入込んで居候として過ごし、みじめな生活を送った。

南昌時代

（平成十一年回顧録より）

上海の四川路のネオン街とも、しばしお別れが続いた。都合よく前田紙店（前の店）に遊びに行ってる時、長江（揚子江）の九江から見えてるところにある、松永菓子店の主人と会って、話していると、「丸本君、私の所に来て菓子の仕事を手伝ってくれないか」の話あり。私も二十二歳の若さで、毎日居候で遊ぶのが嫌で、困っている時、住み慣れた上海を去るのも辛かったが、



奥地で荒稼ぎしてみる気になり受入れた。

第一回の揚子江を登ったのもこの時である。松永さんに連れられて、上海ワイサンマトから、呉松を左に見て、長江（揚子江）を、登ること四日間、武漢・鎮江・安慶・鄱陽湖や景德鎮を左にみながら、やっと九江に着いた。十ノットの二千屯の船で、川の流れが四ノットから六ノットあるので、下りの上海行は早い、登りは遅い。雨期になると、まだ遅いので、船中で見知らぬ人と知り合いになる。今、思い起こせば、この川を三回程往復した。

揚子江を登り下りしてこそ、初めて中国の雄大さが分つて来る。空路ではその感覚が掴めない。小学校で学んだような、筏で生活しながら、川の流れにまかせて行く人も居るかと思うと、船を綱で引きながら、岸边を歩んで、登って行く人もある。

着いた港の九江は、江西省の北に位置し、揚子江沿いの河港都市で、中国五湖の一つ、鄱陽湖の入口にあり、後ろには有名な蘆山があつて、蔣介石の別荘も近くにあり、一日で往復して見学出来たのに、雇われの身であれば、そうはいかなかった。今だに、残念である。

さて、菓子屋の仕事は、朝五時頃起床、市場に行つて、卵買いから始まります。二百個位の卵を、大きな鉄釜に割つていれるので、要領を得ず、中国人に負けるのである。残念だが永い経験者には仕方ない。本当か嘘か、シュークリームらしいものが出来るのが十時頃、店の戸を開けると、お客は日本の兵隊さんが入つて来る。夕方迄には売り切れる。

他の菓子も作っていたが、私の手には出来ない品ばかりで店番が専門です。三ヶ月もたった頃、奥地（戦場）から来たような格好で、庭先で買物をしながら、「君、僕の所に来てくれないか」と話しかけて来るので、初めて会う人だし、ためらっておると、南昌で兵站旅館をやっているけど、手不足で困っている。上海迄行く予定との事である。九江まで来て、シュークリーム造りをするよりはと、最前線迄行く決心をした。危険も伴うが、二十三歳で、若さで、思い切って、兵站旅館の帳場さんとして、南昌行を決心して、主人になられる山村さんと、軍の船で揚子江の支流鄱陽湖を横断して、贛江に入り、二日間で目的地の南昌市に着く。南昌は、江西省の省都であり、三十六師団本部がある。早速兵站旅館事務方を任される。宿泊証明のチェックと部屋割の仕事、階級は将校以上で、以下は、集団宿舎に配置される。金銭は一切扱わず、昼間の部屋掃除が、気に障ったが、飯の種であるので、忠実に命に服した。三ヶ月位経って、接待サービスも慣れた頃、東京八王子連隊の間部隊の副官・増田中尉から、帳場で話があり、「丸本君、最前線まで来て、帳場さんでは仕様ないから、俺の部隊で酒保をやってくれないか」と話があり、「来週又来る。隊長とも話をしてくる。苦勞も多いが、面倒見る」と話されて別れた。しかし第一に材料買入れの資本金がない。先ず必要な物は、砂糖・小豆・粉・茶器・おわん類である。材料を売っている福岡県の筑後の人で、一進商会（進一郎）に、すべてを打ち明け、始めに砂糖・小豆・粉等、ぜんざいの材料を掛買いで出してもらった。初めて作ったぜん

ざいを野砲部隊の陣地迄運んだのが、佐藤運送（安部辰雄さんの勤務先）だった。

ぜんざい作りは朝四時半頃から、山道を下って水汲みと小豆洗い、煮込むのも平釜の一斗用で三杯。出来上りは、ドラム罐に入れて売る。六時点呼終ると同時に兵隊さんが列をなして買いに来るのに追われて、苦勞も辛さも忘れてしまう。茶器が不足すると、飯盒の蓋で買い求める。一杯十五銭の団子入りぜんざいも、昼までに品切れが続いた。要求するものはどら焼。甘い食物が不足したら、うどん・天ぷら等。一進商会からも信用されて、要求する物が手に入るようになる。酒保で利益が出る頃になると戦闘も一段落、兵隊さんも暇が出る様になった。毎日便衣隊の掃討戦、今日も誘いがかかるが掃討戦は口ばかりで、野菜・穀物の徴集で、暇つぶしに行くのである。

増田副官から呼び出しを受け「丸本君、野砲は山砲と交替するので内地に帰る。今度来る山砲は大阪部隊で、兵隊の数も今より減るので引揚げたらどうか。私の部隊が待っている酒保の食料品（酒・サイダー・罐詰類）は置いていくから、引受けて南昌に引揚げなさい」

増田副官の意の通り、前線から引揚げた。今、思い出すと、あの時の苦勞と財産が、現在を造る元になった。南昌に来て、払下げ品を売払って、財産らしい物が出来、商社の紹介で物産品の買付けをして、中国人の商売の駆引きの上手さを見習った。

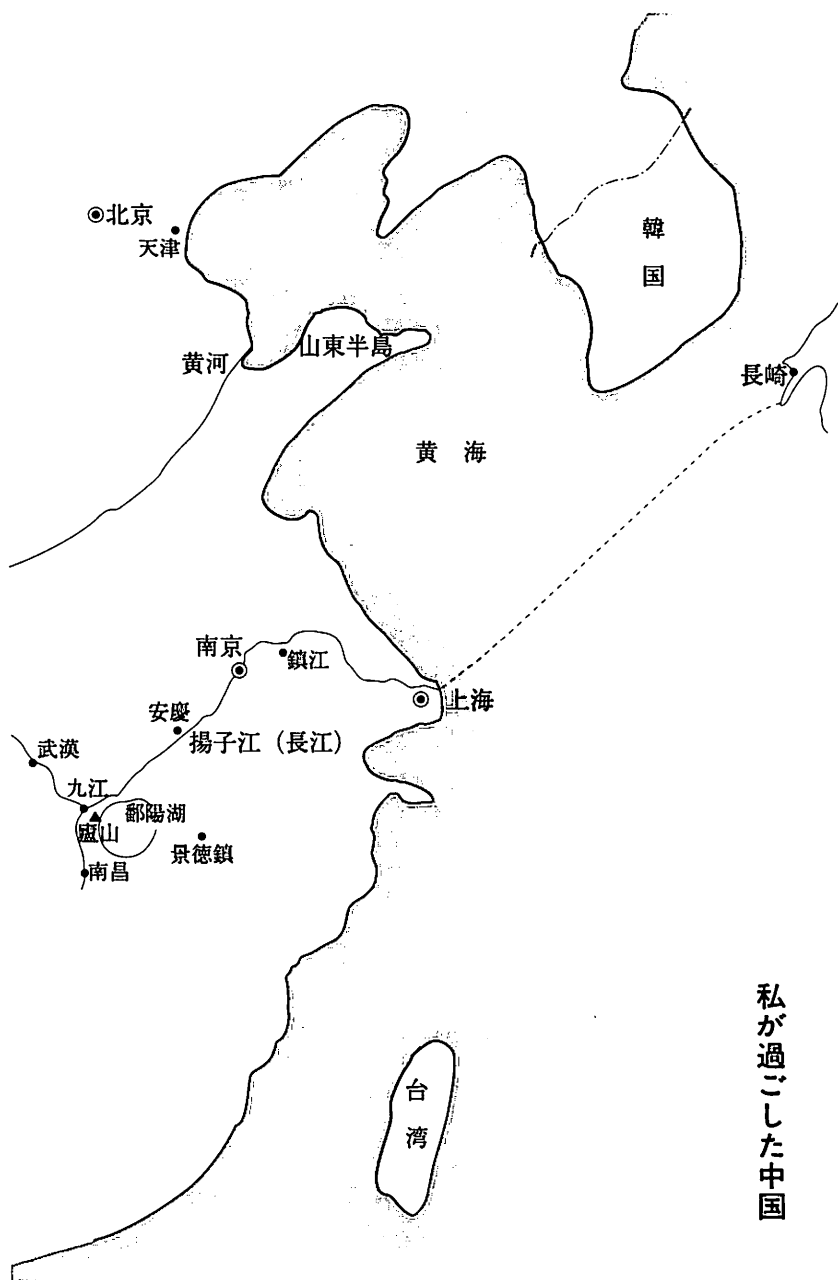
水槽場を一つ借用して、養魚してそれを蒲鉾屋・魚屋に契約販売業をしている時、碁の関係

で知り合った進一郎様からの話で、師団の経理部長から私に、錦糸の織物工場をやって欲しいとの事であった。私も急には返事が出来ないが、中国人の知人と話合った折り、黄さん、熊さん、周さんの反物関係者が、大丈夫、引受けてくれとのこと。そこで織物工場を南昌でやる事になった。南昌市高升巷四十一号華昌染織公司を、進一郎責任者、丸本柳八工場責任者で引受けた。工場は二〇〇〇坪、織物機械は全部で四十台あった、錦糸乾燥室も広かった。織物職人男五十人、女子十人、家は、古家を軍隊のお声がかかりで見つけてもらった。

周囲は中国人街であったが、百米位の所に日本人用の病院同仁会があった。

製品の織物は、敵地で食料品と変えられて自給自足の一部になっていた。織物の責任は工場長の陳さんにまかせ、事務の方は黄さんにまかせ、私の仕事はもっぱら進一郎さんとの連絡と製品の受渡しと材料の受取りだけで、その仕事のない時は、中国人と麻雀遊びで過した。中国人の欲しがる衣類とか、商社が欲しがる土産物を中国人を使って売買したものだ。二十七歳位で錦を飾って郷里千々石町へ帰ったのが昭和十八年。父親が残っていた借金を払ったのもこの時だった。長崎でお世話になった松永さん一家、前田さん、丸山さん等と十人位で花月で食事を共にした記憶がある。南昌から南京前の揚子江を、浦口に舟で渡って、汽車で二十四時間、天津を経て北京着。一泊して姉妹と会って、奉天の兄貴一家と朝鮮を縦断して故里に帰り、久しぶりに親兄弟と会った。兄修治の病気が重体で、その年の十月に三十四歳で亡くなった。知

らせを聞き、可哀相でもあるが、それより母が金が無く困つてると思い、三百円を台湾銀行から送金した。後になって母が死ぬ間際に、私に話してくれたが「あの時はあの金で助かった」と喜んでくれた。今になって思うことは、母が金に困って、不自由をしている時、加勢してやるべきだった。金の要求はなかったが兄修治の介抱には、親兄弟が苦勞したようだった。



私が過ごした中国

終 戦

(平成十一年回顧録より)

夢にも思つた事がない凶報が耳に入つたのが、昭和二十年八月十五日。「日本人は国民小学校に十二時集合せよ。」領事館からの指令である。館長の話では、陛下直々の言葉を受けるのだから、皆様静粛に謹んで拝聴されたい。ちょうど十二時ラジオで陛下の声が聞き取れる。かすれたような声は、敗戦の通告であつた。信じられない言葉に、一同心も戸惑い、出る言葉もなく、ぼんやりしていると領事館長は早速帰宅して、明日十六日正午に波止場に船がおるから、最小の荷物を持つて集合のことと伝えた。急いで家に帰つて、まず工場の始末を先にした。

在庫を工場の全員に分配した。塩・油・米も全員に分配した。日本円より物を要求する。皆が私に同情して、「丸本さん早く帰つた方が安全だから、共産軍が来たら大変だから。私達は皆で話合つて帰るから、私達のことは心配なく」と言つてくれた。皆の思いやりに感謝しながら、涙をふきながら、皆と別れて来た。「上海から戻れるなら、又一度帰る。」と言ひ残して、別れて来た。今でも後髪を引かれる思いがする。自家用車（人力車）の新車も車夫の熊さんにやつた。荷物も別に持たず、リュックサック一包を持つて皆と別れる。五年近く馴染んだ南昌とも最後の別れとなつた。九江の日本人小学校を一時宿泊所にして十日位そこに滞在したが、上海

からの船も来ず、何時になるか判らないので鄱陽湖の入口にあるボータクに抑留して、上海から日本行の船を待つことになる。元日本軍の馬の食糧倉庫が、南昌居留民六百人の宿泊所になった。

一人者、独身者は中二階の畳一枚の広さが我住家である。そこで生活すること十ヶ月位でやっと上海に移動する。上海に十日位滞在し、いよいよ日本に帰る日が来た。昭和二十一年六月十五日に福岡上陸。持ち帰ったのがリュックサック一つだけであった。福岡で引揚げた全員が一人日本円千円を国から貰った。この金が日本で初めて身につけ、第二の人生が始まる元になったのである。

思えば、昭和十二年一月十五日に徴兵検査で、足の偏平足であったので兵役は外されて第一乙種編入となった。

同年十二月十日、上海の福昌洋行（藤島末吉）に、店員として応援で手伝いに行く。

上海事変勃発、^{ゴッパツ}戦闘は南京に向って進撃中だった。

大陸上陸以来、昭和二十一年六月迄、九年近く中華民国にお世話になった。まさか敗戦で引揚げるとは思ってもなく、一抹の淋しさもあった。二十九年の過去を元にして、裸一貫で第一歩から進んで行く覚悟であった。

今あるものは身体一つとリュックサック一個と貰った千円と二十九年間の体験と、その内七

年間の商いの要領、三ヶ月の軍隊教育は頭にある。先の人生をいかに發揮するか、第一に苦勞をかけた母を安心させ、我家庭を作り出すのが目的であると思った。

昭和二十年八月十五日十二時陛下の敗戦の発表と同時に日本国民の地位は転落し、中国人の応対から変わってくる。使用人の中国人は同情的で、別れるのに涙してくれる中国人もいた。全居留民が新しい道を探し求め、内地大陸と同じに第一歩を踏出すのだから、妻子ある人は大変だったろう。私は二十九歳一人で荷物もなく身軽に帰国が出来る。リュックサック一個と棒状の金を五本持つて十四日皆と別れて思い思い故里に帰った。愛野駅に着くと千々石の人で原口さん夫婦と一緒に、荷馬車一台貸切っていたので助かった。我家に着くと母は留守で、しばらく寝てると畑から帰って来た。愛情いっぱい迎えてくれたが、さびしさとつかれがあるようだ。後での話だが姉一家、妹一家、弟勲が帰国して私で四人目、母のつかれとさびしさがよくわかった、母の苦勞性をなくしてやりたい。その夜、母の話のなかに「今年は鰯が取れて景気はよくなるが、煮干になった鰯を入れる袋がなくて送ることが出来ず、皆金にならず、こまってる」その一言が耳に入った。早速翌日 長崎行を決行し袋さがしを始めた。紙配給組合は万屋町牟田口紙店の後にあつて、そこに井上紙店の社員だった石橋君に事情を話したが、切符がないと一枚たりとも、分けられないと断わられた。返品か金にならない切符不用の紙はないかと再度たずねると、上司と話していたが、倉庫を案内し奥にある仙花紙の新聞紙より弱い

茶色の巻取一本二百キロ位の品を見せて、「これなら切符も要らない。十五本あるが、現金なら今日でもよい。一本八十円位と思う。」早速、私は手付をその場であるだけ渡して最初五本持ち帰って金に替えたら取りにくることにして売買の約束をして帰った。断包^{タチホウチヨウ}丁と定規を買求め砂浜で解体作業を始める。手伝人も自信のある秋島君、丸山君に大変力になつてもらった。一番こまだったのが麦粉で、食糧で重要品だから手に入らない。友人の馬場君が麵の製造をしてるので、落とした麵粉をはき集め、分けてもらった。捨てる神あれば助ける神がある事をつくづく悟りました。張子さん（袋を貼る人）の教育が大変で、都合よく敗戦後で物不足で金不足、どこの家庭も同じです。一枚四〇銭位だったと思います。袋貼りの申込者が殺到して近い者から願うことにした。製品の売れ行きが又殺到し、町内だけでなく町外から買いにくる有様で生産が間にあわず大変でした。商いの味が身にしました。小浜の伊勢屋で慰労会をして結婚話が出たのもこの時でした。母から勧められ、年も三十歳になつたし、母の言葉に従つて十月に行いました。袋のおかげで悪い時期にも拘らず驚く程の式が出来ました。男六人兄弟で我家で式を挙げたのは初めてで、母は喜んでくれたでしょう。

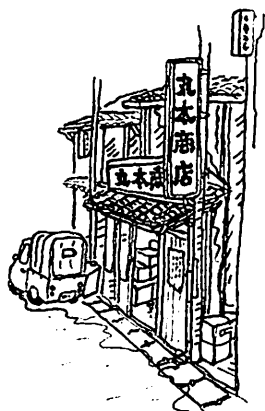
油屋町に創業

(平成十一年回顧録より)

昭和二十一年結婚した私は、十五本の紙組合の倉庫に眠っていた無切符で買った紙で、七万円の利益を出した。この金と丸山さんの友人の立石様から三十万円を借入れたお金をもとでに手漉工場を始めました。岐阜の佐藤さんに来てもらい指導を受けて、道具は揃ったのです。しかし肝心の原料がなく、その内に筑後の手漉の本場の製品に押され、売れ行きが悪くなり、店を整理することになりました。設備、商品を一切投売りして、私は立石さんの仕事を手伝いすることになりました。またしても丸裸になったわけです。

昭和二十四年十月に立石を辞めました。その頃私の親戚に当る横田林三郎義兄が、油屋町の不法建築の川の上で鰻頭屋をしていました。鰻頭屋の仕事は朝の六時頃には終わるので、その後を私に貸すことを約束してくれたので、借金をして又、紙の商売を始めたのですが、もう二度と他を望まず妻子と食べるだけの仕事をして、その日暮らしてよいと思いました。よく働きました。

まもなく場所が狭くなり二十五年の春先に、油屋町の若杉宅を店に借用しました。それまで



の販売方法はリヤカーに積んで紙袋を店屋さんに売りまわっていましたので自転車に変え、横田さんの紹介で岡島啓四郎君を入れて、岡島さんの紹介で吉岡泰志君を販売員として入れました。事務の仕事は松尾恵美子さんを採用した。松尾さんだけが給料払いで他の人は、その日の仕入れた分を支払って帰る方式でしたが、よく売れました。自家製の袋だけでは不足したので、バンド、紐類、セロファン袋迄が必要になってきて取扱品も増えてきて、ちょうどその時、広島県大竹市から製袋メーカーのタイヨー印・中川製袋の営業・佐伯さんが売込みの目的でみえられて、月末締の九十日の手形払いでお取引をすることになったのです。若杉様からお借りした店も狭くなり、市原様の家をお借りすることになり二度目の引越をしました。売上も年々倍増してゆきました。中川製袋の砂糖箱は長崎で一番の売上を為し遂げました。

昭和三十一年、紙業界では手を出さない化学製品のポリエチレン袋を販売することになり、大倉、中川の二社から仕入販売したのが見事的中し売れ行きがよく、とたんに長崎全市に拡がっていった。売上も前年の倍近くまで伸び販売員も倍になった。清田君、吉岡兄弟も加わってきた。郷里の千々石町から、秋島君、松本勝義君、林田光雄君を呼んだが、市原様の裏の倉庫に寝泊りし、食事は、私共と一緒に家内が賄っていた。南高方面に販路を拡げるため、諫早市内の陣内写真屋を借りて、初めて営業所を作り、西山君が得意を拡げてくれ、私も島原半島方面をバスと汽車で営業をしていった。(今ではこれを秋島君の息子が独立してやっている)

活版印刷機が必要になり、裏の倉庫を借りて、市原様と共同で始めた。文明堂のかけ紙印刷をしていたがその後、他で仕事していた木下君、円能寺君も活版仕事を手伝うようになった。取扱商品が増え、年々倉庫が増え、近くの酒井様の倉庫を借りて、中川の製品を一杯つめ込んで小売だけでなく、卸も始めた。

昭和三十四年頃と思うが、油屋町の岩永印刷の奥様から、小柳さんの土地を買ったらと相談されたが、とても手持金がなく金を作るのに苦労した。店を始めた時から十八銀行に毎日、百円ずつ積立を五年間していたおかげで十八銀行から信用してもらい借入が出来、足りない分は、遅沢様、横田林一様、権藤千恵可様に借りてやっと七十坪の土地を手に入れた。岩永の奥様にこの時、大へんお世話になった事を忘れてはならないと思う。やっと我が土地、我が家に住む事が出来たので、妻子共に内心、喜んでいたと思う。妻は借金の利子払いに毎月行っていたことを、今も話している。この土地が値上りして今、会社の財産になっている。

昭和三十七年頃に、平石先生との出会いがある。娘（現社長）から同級生のお父さんが税理士の免許を取ったから、何かお願いしてみたらと言われた。会社も法人に改組して四、五年が経っていて、今後大きくなるためにも、帳簿をしっかりとっておきたいと思っていたので、早速お願いすることにした。

最初は喜々津工場の帳簿を月一回出向いて見てもらっていた。後で聞いた話だが、平石税理

士事務所の第一号のお客だったと言う事だ。

先生のお年も私より一つ若いだけで、仕事以外でも話が合って、公私共にご指導をしてもらっているが、何かにつけ、丸本を影から支えてきて下さった。

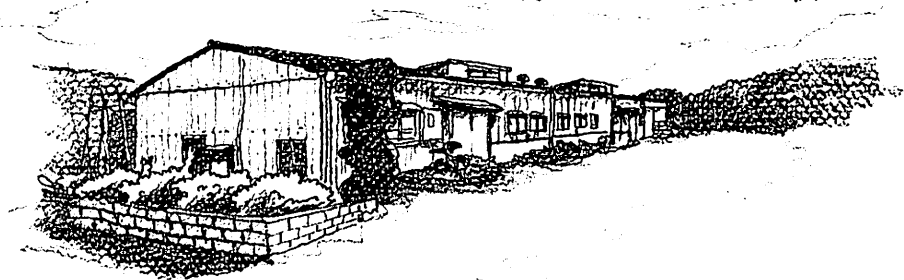
その頃会社の信条を平石先生、吉岡泰志君、岡島君と私の四人で作った。

網場の肥前屋に泊り込みで会議をやって考えたのだ。第一に自分自身が健康であり、懸命に働き会社の繁栄を創り出すこと。それが、家庭の幸せにつながると思っている。

工場第一号建設

(平成十一年回顧録より)

昭和三十八年、西彼杵郡多良見町に本島さんから土地を譲ってもらい工場の第一号を建設したが、この時の喜びは言いようもなく、嬉しかった。



た。この後も喜々津工場として増設して昭和五十七年に諫早中核団地へ移転するまでの二十数年間、丸本の製造部門のスタートとしてグラビア印刷、発泡の技術を、ここ喜々津工場で構築していった。

昭和四十一年には、福岡拡販のため福岡丸本を設立した。吉塚の中川製袋の工場跡地を譲り受けて事務所を開設、島原にも島原営業所を開設して、山本浩平常務と吉岡泰恒所長がそれぞれ就任した。その後も業績は順調に伸びて、福岡工場を粕屋郡志免町に新築し、それまであった大野城市の丸本化工印刷を合併して、ここに移転した。昭和四十八年には、長女（現社長）と総員七名でヨーロッパ視察に行く余裕も出来て、情報を身につけてきた。デュセルドルフのインターパックの規模の大きさに驚いた。この包装展でドイツのディスコマットの広幅製袋機を福岡工場に導入して、ニャンニャンバッグや、い草袋を生産した。翌年はこの袋を持ち込み、福岡で第一回丸本グループの包装展を開催した。バッグの問い合せが五百件位あって大盛況であった。ショッピングの手提袋^{テサグ}はどうなっているか、今のドイツを見たいものだ。

毎年、秋のくんちのシャギリの音^ねを聞くと思い出すのは、油屋町での「川船」を初めて奉納した時の事である。

会社を油屋町に創業して二十数年目になり、町内にも随分と世話になっていた。

昭和四十八年に油屋町はくんちの当番町となった。それまでくんちには奉納踊りを出していたが、この時寺田自治会長や伊藤さん達との話の中で、何か引き物を出そうという事になり、川船を出す事になったが、さて、その船がない。私が魚の町の友人 富永君（みやこ紙工会長）へ仲介してもらい、江崎べつ甲さんから川船をお借りした。

総指揮官に私になって、根曳衆は町内の若い青年達で結成したが、何せ初めての事で、苦労があつたが、何よりも私が辛かったのは、庭先廻りで、足が痛くて、足を引きずりながら歩いたものだ。くんちの打上げは、祐徳稻荷神社に全員でお礼参りしてその後嬉野温泉の旅館を貸切ってやった。やり遂げた満足感で、この一日は楽しいものであつた。

この行事がもとで、油屋町の青年達が団結し、「油屋町青年部」が出来たのである。

あれから二十数年が過ぎたが、青年部は今も何かあると町内行事を支えて活躍していると聞いている。

おわりに

個人創業以来五十年、国民として納税の義務を果たしたのが四十六回、欠税したのが、創立当初の二回と、平成バブル崩壊の時の一回である。最高の納税は昭和四十九年のオイルショックの時に、仕入先の温情で品切れなく売りつくした時、最高の利益を出した。その時の利益とマスコット様（山口勇様）のおかげで、喜々津工場が出来た。

福岡、千々石、諫早、長崎、松浦と合わせて今一二、五〇〇坪の土地財産があるが、決して今の世の中 安心できない。あぐらをかいてはいけけない。企業は生き物であるから油断大敵である。一時たりとも脇見運転は禁物である。そして、ここまで育ててくださったお得意様、後方から支援してくださった仕入先、多くの人のおかげで、今日の丸本があることを忘れないように。そして故人となられた先輩や、会社を退社され活躍しておられる先輩の血と汗の結晶のおかげで今日の自分たちの幸せがあることを忘れないように。私と感情的になり、退社された方にも深くお詫びし頭を下げます。私も今年八十二歳になりましたが、世のため、人のために限りある人生を打ち込む覚悟であります。

（株）丸本はこれからは創立百年を目標にして、それを地球一二〇五〇年にみごとに達成できることをただ、祈るだけです。



丸本柳八語録集



◆ 丸本柳八語録集 ◆

物には生命がある 使える迄使え

生産者 販売者 消費者 三者が平等な利益を

聞いて かみくだいて のみこんで最善の判断

人から使用されてうらむより使用する身になれ

他人を育てるには始め相手の懐に入れ 後で自分の懐に入れる

商人は敵をつくるな 敵を友とせよ

芯のある人を友とせよ 芯のないローソクは燃えない

苦勞は若い時金で買え 樂は他人に与えよ

百のムチより一つの愛情 生涯残る

子供は親がしつけ 部下は上司がしつける

夕立がきてもすぐとりこめる態勢にしておく

先祖を尊とべ 親と上司の命令にはそむくな

貸した物は忘れても借りた物は忘れず返す

常に笑顔で人より先に挨拶をする

困難に遭遇してもくじけず 樂觀せず進んで道を開く

お金は生き金と死に金に 使う前に分別して大事に使う

美男美女より健康が第一

周囲に思いやりのある人は 周囲の人から自分が作られていく

◆創立四十一周年記念式典にて

酒におぼれなかった。賭博におぼれなかった。マージャン、女におぼれなかった。三つのおぼれをしなかった。即ち遊び事に深入りしなかった。

◆合同朝礼にて

母は九十五歳で亡くなった。その母がいつも言っていたのは、「ローソクは芯がなければ燃えない、芯のある人間になるように」と常に言っていた。(芯は草の茅から取る)

人との付き合いは芯のある人と付き合いように。芯の無い人は燃えない。商人にはこの芯

の無い人が多い。即ち商売は儲かったら終わりという考えで芯の無い人が多いのである。芯のある人を作らなければならない。

何か事を起こす時には必ず被害があつても立ち直れるようにして事をする必要がある。

但し、会社がダメになつても皆に迷惑をかけないようにすること。退職金も支払できるようにしておくこと。

◆合同朝礼にて

福岡工場が休憩所にクーラーを入れて貰いたいと言つてきた。(費用は五十万円かかり、現場には全部クーラーが入っている。長崎工場・マルサンより機械設備も立派である)それなら応接間を社員が使うように話した。

会長はじめ役員が行つた時は扇風機でよい。長崎工場・マルサンの工場は日中四十度位あるのに働いている。人間忍耐がなくてはならない。我慢が大事である。死にはしない。

証券会社のように泡銭は絶対ダメ。お金を残すのは汗を流して手に入れたお金でなくてはな

らない。(証券会社の人を株屋と言っていた)株で儲かった一千万円と汗を流して手に入れた一
万円と同じ位だ。お金を大切にして貰いたい。

◆合同朝礼にて

(値下げ傾向の時) 在庫は0とすること。値上げの時は在庫を多く抱えておくとよい。

◆合同朝礼にて

仕入先に良い感じを持つて貰わなければならない。仕入先を大事にしなければならない。
“丸本さんのためには”という気持ちにしなければならぬ。いざ鎌倉の時が大事である。
助けにきてくれるようにしておかなければならない。買う方が殿様であつては伸びない。

◆合同朝礼にて

納期は営業の人が注文をした日から製品がどんなに動いているか関心を持つこと。工場がヒ

マな時もあり又、混んでいる時もあるので、営業の人は常に納期がどうなるか注意しておくことが必要。注文したからそれでよいというものではない。版ができてでも原反仕入が必要で、次に印刷がすぐにできるかどうか。

三色刷が済んで五色刷に移る等の手順がある。校正・製版・印刷・ドライ・スリッター・製袋・外注加工・運送等全部で八つの段階がある。どこをどう動いているかを注文してからもよく気をつけ、追いかけておくことが必要である。

◆合同朝礼にて

毎月一日に諏訪神社に参っているのは只、神だのみをしに参っているのではない。神は常に自分自身の体の中に、頭の中にあるので神社に参れば事足れりということではない。

毎月一日に参るというのは、今月は是非無事故で業績も何とかやり遂げようと自分自身に言い聞かせ、先月はどうだったと報告をし、気分を引き締めるために参るので二日ではなく一日でなければダメである。

神社参拝の原点は何かというと一度大きな事故があり、人が死んだことがあった。そこで絶対に事故を起こさないようにし、業績も伸ばしていこうと自分自身に報告するために行っている。

◆合同朝礼にて

昨日、マルサン化工の佐藤さんの結婚式に行ったが、お父さんが「いい会社に入れて貰って、休みの日には家を加勢してくれているので助かっている」と感謝された。皆も年間百二十日の休みがあるので、半分の六十日でもよいから人のため、又は家のために尽くすようにしたらどうかと思う。

◆卸センター成人式にて

この間、本で読みましたが、ロッテの村田兆治投手は現在四十歳です。現役二十三年を頑張っている人ですが、四十歳になったことを機に南紀からの自主トレーニングを海を越えて、今度グアム島で始めました。四十歳を越えてなお自分の体を鍛えることへの挑戦です。それも、どこかの選手の様にスポンサー付の自主トレーニングではなく、自前の金でトレーニングしているそうです。スポーツマンだから体に投資するそうです。そしてまだ十二年は投げ続けたいと希望しているそうです。素晴らしいことだと思います。

商売の勤は大事である。又それは生まれつきのものでなく、長い商いの中で育っていくものである。努力するものです。五十代、六十代はまさに勤が花開き、軌道に乗れる時代だと思います。

◆創立四十九周年記念式典にて

今、日本中が不景気で苦しい。本日、ご家族の方にもおいでいただいているので一言申し上げるが、ご主人に給料のことばかり文句を言うより家庭においてもしっかり節約して、出ていくお金を抑えた方がよいと思う。たとえば、十日分の味噌を十一日分まで使うくらいの努力があってもいいはず。



丸本柳八関連記事



丸本柳八関連記事

昭和六十二年九月読売新聞 「経済人」より

◆ 総合包装資材製品販売会社で、昭和二十五年に創業。三十二年に法人に改組（資本金百万円）した。紙とのつき合いは昭和七年から長崎市で勤めた紙屋から始まり、同十二年、独立したくて二十一歳で中国・上海へ。一時帰国後、今度は中国・南昌で織物工場をするうちに終戦を迎え引き揚げた。再び紙の仕事を始めたが、製紙工場がうまく行かず失敗。「これまでに五回丸裸になった」と笑うが、この時の苦労が現在の経営に生かされている。

「地道にやっついていこう」をモットーに、切った紙を、主婦の内職仕事などとして張ってもらって紙袋にし、自分で市内の店に売り歩いた。戦前の苦労が身についていたため経営も順調で、六十一年度の年商は三十三億円。

「ここまでこれたのも社員のおかげです」と話す丸本さんが、社員に示す気配りは細かい。設立当初から、クリスマスの時、慰労のため、家族持ちの社員宅を土産を持って回っている。小学校前の子供がいる家庭には、事前にその子が何のおもちゃが欲しいか調べておき、そのおもちゃを持参、小学校に上がった子供には肉を持っていく。「子供が待っているとやめよう

にもやめられない」と苦笑する。

平成一年毎日新聞「最前線の記事」より



鮮魚用発泡スチロールからシール類まで、物を包む包装材全般の製造加工、販売が業務。

二十五年、中国・上海から引き揚げてきた丸本柳八社長（七一）が従業員二人で創業。「スタート当初は昔、雑貨店などでよく見かけたでしょう、あの茶色の紙袋です」。材料確保に苦労したが、経済成長の波に乗り、業績は着実に伸びている。

丸本社長の先見性には定評がある。創業間もなく、紙袋に代わって、将来ビニール袋が主流になると読み、九州では初めて三十一年から原料を仕入れての加工製造を開始。

現在、手がけている包装材は約千六百品目。機能、保護性、そして外觀——と取引先の注文は厳しい。「消費者の目を引きつけるのはもちろん、商品を守る必要があるんだから、当然でしょう」と同社長。

新市場開拓と情報収集のため昨年十月、東京に子会社を発足させた。また、中国から技術者を招いて指導、印刷機を贈るなど、海外への目配りも怠りない。「関連の貿易会社がNICS（新興工業国）との輸出入で利益を出しています。中国を含めて限らない可能性を秘めていますね」

◆創・業・者・ス・ト・ー・リ・ー

昭和五十七年十二月日本商工会議所月刊誌「石垣」より

美しく印刷されたプラスチックフィルムに入っているいろいろな食品。これは毎日、誰もが必ずお目にかかるものだ。紙の時代から現在まで、この「包装」一筋に歩んできたのが、(株)丸本の歴史である。

その創業者、丸本柳八会長の前半生は、幾度か「丸裸」になりながら、そこから立ち直ってきた歴史でもあった。

丸本さんの生まれは、噴火が続く雲仙岳の麓、長崎県千々石町。八人兄弟の三男である。家は網元だったが、十二歳の時、父親が亡くなり、不漁も続いて、ついに漁もやめ、現金収入の道もとだえるという不運が重なった。

「そんな時、母は残った資産を守りながら、子供たちを厳しく育ててくれました。これが、私が今一番感謝していることです」と丸本さん。

小学校を出ると「口べらし」で長崎市に丁稚奉公に出た。十四歳である。勤め先は紙屋だった。「ここで商いの道を学びました」と丸本さんが言うように、ここでの経験が現在の(株)丸本を築いたのである。朝は五時半から夜は九時まで働いた。月二回の休みだったが、「当時としては

いい方だった」。

自慢の「二十歳で独立」

昭和十二年、二十歳の時、独立して上海に渡った。「二十歳で独立、というのが私の自慢の一つです」と丸本さんは笑うが、これから丸本さんが「汗と涙の時代」という苦難の道が四十歳まで続く。

「戦時中で、軍隊も物資が不足、チリ紙などの紙製品は絶対必要だ」と、若い野心が中国大陆での商売へとかり立てたのである。

ところが軌道に乗って二年半経つと、召集令状。店を先輩に譲って兵役についたが、わずか三カ月後に除隊。「店を譲ったのは失敗でしたね。また一から出直ですよ」。今度は江西省南昌で、軍に納める綿織物などをつくっていたが、これも敗戦でまた丸裸になってしまった。

日本に引き揚げてきたのは二十一年六月。もう三十歳になっていた。

「博多港に上陸すると、国から一人あたり千円ずつもらったんです。思いがけない入金で、しかも日本に上陸した喜び、今までもろくなものを食べてこられなかった反動から、酒を飲んだり、「銀メシ」を腹いっぱい食べたりして使ってしまう人も多かったという。

しかし、丸本さんは「この金を元手に商売をしよう」と考えた。当時、紙は統制品で配給切

符がなければ買えない。「ところが、切符の必要がない紙があつたんですよ」。新聞紙にもならない桑の皮で作った、破れやすく使えないものにならない紙が倉庫に積んであつた。丸本さんはそれを千円で買った。

千円が半年で七万円に

「結局、商人はヒラメキですね。私の郷里は漁港で、ニボシの産地なんです。港にニボシは一杯あるけど、運ぶためにニボシを入れる袋がない、という漁師の話を聞いてピンときたんです」。破れてもいいというので、早速ニボシの袋をつくろうと思つたが、袋をつくるのにはノリがある。これも統制品だ。しかし、床に落ちてゐる小麦粉は対象外である。

「うどん屋やソーメン屋に粉を床に落としてもらつて、それを拾い集めてきてノリをつくつたんです」。うどん屋にとつてもその方が高く売れたのだそうだ。

またたく間に紙袋は売れ、千円は半年で七万円になった。そこで今度は、手すきの製紙工場を始めることにした。「これがまんまと失敗しました。技術とタイミングが悪かつた」。製紙に關しては素人の技術だつたし、大手の製紙工場も復興してきて、質のいい紙を供給しつつあつたのである。結局、借金だけが残つた。昭和二十四年のことである。

金を貸してくれた人の所に「人質としてお手伝い」に行く。紙の原料として、漁師から不要

のロープ（原料はマニラ麻）を買いつけ、それを製紙工場に直接売り込むのだが、これは双方から喜ばれた。こんなところにも丸本さんのネットワークづくりのうまさ表れている。

翌二十五年二月十五日、丸本商店を個人経営で始める。紙を買ってお菓子などを入れる紙袋をつくり始めた。食品包装用品、資材でトップクラスの同社の出発である。何度か丸本さんの「丸裸」はあったが、この日（三十三歳の誕生日でもある）からは順調に業績は伸びていくことになる。「結婚もして、落ち着かないかん、食べるだけでいい」という無欲の再スタートだったが、納入先もよく知っており、供給元にも信用があつて大量販売につながっていった。

三十年にプラスチックフィルムのポリエチレンが市場に出回ると、その販売を手がける。「これは、水には絶対に強い。これからは必ず食品の包装はポリエチレンにかわっていくと考えました」。

三十二年には、資本金百万円で株式会社とした。「もっとも百万円の水がなかったので現物出資ということで、個人の在庫が百万円として設立しました」。この時、従業員には退職金のかわりということで、全員に株を持ってもらった。「社員持株制」は、当時としては珍しかった。

ここから、同社のさらなる飛躍が始まっていく。四十一歳であつた。

グラビア印刷への進出、発泡スチロール容器への進出など、販売から製造部門へと大きく業容を広げてきた。

「不況が来るほどうれしい」という丸本さんの言葉は、石油危機の折には利益を通常の三倍以上出して、発泡スチロール製造の設備投資を可能としたことや円高不況にも影響を受けなかったことによって証明されている。「夕立に備えよ（手を広げるな）、敵をつくるな、物も使えるまで使え」という商人としての信条が安定経営のバックにあるといえよう。

平成五年八月TRS情報「シリーズ・人」より

◆ 丸本さんは長崎の経営者間で人気がある。あちこちでこう言われた。「インタビューするな

ら丸本さんに行かんですか。」それで今回は丸本柳八会長に登場頂くことになった。

さて、会長の人柄を物語るエピソードを一つ。

「丸本さんは料亭でモテなれます。そいも芸妓さんばかりじゃなくて『丸本の会長が来なさった』て言うて仲居さんの寄って来るとですよ。仲居さんが寄って来ると言うとは、それなりの人柄でなからんとねえ。」

これをそのまま会長に伝えると、「乗せたらいくらでも喋るけん女性の話は聞かんでくれんね（笑）」破顔一笑、人望が滲み出ている実に良い顔の丸本会長である。

昭和二十一年中国・上海から引き揚げてきた会長は斯業に就いた。

「当時はモノさえあれば売れた。けどそれを捌く頭数を揃えようとが大変やったでしたい。その頃一緒に働いてくれた社員は今も全社員の一〇％居ってくれてね。そりゃ仕事の処理能力とかからは若か、力のある者が良かとでしょうけど、今度の台風の来た時でも真っ先に駆けつけてくれるとは当時からの社員ですよ。有難かです。」

「会社は頭のあるだけでは発展せんてですよ。物は動かさんば。作ったらトラックに載せて配達して、それで商売になる。」

最初の頃は私はずーっと『動く』方でした。ランニング一枚に素足で担いで汗をかく。自分でやるから利益がでる。仕事をしたら汗がでる。そしたら自然と仕事を知恵を授けてくれる。『実践の知恵』ですな。

そこからしたら高等教育を受けた者の知恵・考え方は違います。汗を流さずいろんな所から利益を出すんですな。そして又頭の良か連中を採り入れていく。そいば見とつて思うたですよ。『もう力だけじゃ駄目たいね』て。

ただね、どっちの考え方が正しかとか、私にはわからん。どっちも大事で思います。」

普通ここまで成功すれば汗をかくことが正しいとか、逆に難しい経営理論を持ち出すかのいずれかの場合が多い。「どっちの考え方が正しいか、わからん。」とアッサリ言ってしまう謙虚な性格、これまた会長のお人柄。拝聴していると驕り昂ぶっている時が多い自分が恥

ずかしくなる。

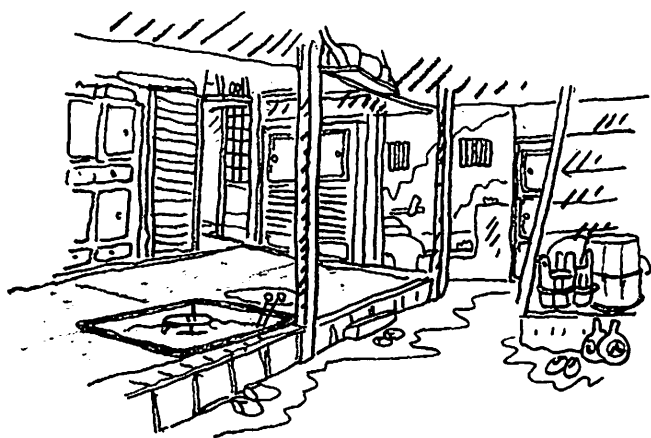
「私がこの商売をはじめたきつたけは祖父が商売人で、小学校出たての孫の私に『千円（今の四〇五百万円位）貸すから商売をやれ』と言うんです。利息も日歩二銭取られました（笑）。それで（商売を）上海で始め、結構儲かりよったですが、さつき言うたごと終戦後引き揚げてまた最初からやり直してしたい。銀行取引？出来るもんですか。思案橋の――その頃は長崎貯蓄銀行とか言いよりやせんやったですか――銀行に信用してもらう迄三年間百円の日掛けばしよったですよ。それから土地代ば借りる迄五年かかったですな。昭和三十三年、油屋町の五十坪、三百二十万円やった。その後買い足して七十四坪、地価の上がつた今では銀行さんに感謝しとります。」

「最初に出た料亭の話じゃないですが彼女達は人を見る目がある。人を見るには一目で判らにゃならん。こいは彼女達も銀行の方も同じ様に必要でしょうね。ここ迄来て私もようやつと大概当たることなつて来ました。」



歩

み



〈歩み〉

大正6年2月	14歳	丸本秀男・キルの三男として長崎県千々石町に産まれる
昭和6年3月	15歳	尋常高等小学校卒業
昭和7年4月	16歳	長崎市賑町 山口紙商店へ入社
昭和12年12月	21歳	中国・上海へ渡り、福昌洋行勤務
昭和13年2月	22歳	中国・上海にて紙製品販売（山口紙商店・上海出張所）
昭和16年6月	25歳	中国・江西省 南昌市にて織物工業開業
昭和21年6月	30歳	終戦で、千々石町に引揚、煮干し袋の加工販売
昭和21年10月	30歳	結婚、長崎市に出て紙加工販売を開始
昭和25年2月	34歳	長崎市油屋町にて、紙包装用品の販売。丸本商店発足
昭和29年	38歳	紙商品の取扱いも増え、中川製袋との取引開始
昭和30年	39歳	化学製品ポリエチレン袋の販売を加える。大倉工業との取引開始
昭和33年12月	42歳	丸本商店を法人（株式会社） 資本金百万円で改組と同時に代表取締役 役に就任

昭和35年	43歳	福岡進出、丸本化工印刷㈱を設立してグラビア印刷を始める
昭和35年10月	43歳	油屋町4番6号を買収・移転
昭和37年2月	45歳	倍額増資（資本金二百万円）
昭和38年10月	46歳	長崎県西彼杵郡多良見町に敷地買収、喜々津工場設立
昭和39年2月	47歳	倍額増資（資本金四百万円）
昭和39年2月	47歳	創立15周年記念を小浜 一角楼にて
昭和39年7月	47歳	増資（資本金五百万円）
昭和41年1月	49歳	島原営業所を島原市下崩山に開設
昭和41年6月	49歳	系列会社・福岡丸本㈱設立と同時に代表取締役就任
昭和42年5月	50歳	系列会社・丸八物産㈱を設立と同時に代表取締役就任
		規格ポリ袋サクラ印の製造開始
昭和42年12月	50歳	社内報「オール丸本」第1号を創刊
昭和45年2月	53歳	創立20周年 北海道社員旅行
昭和46年11月	54歳	税務署より優良法人の表彰
昭和46年12月	54歳	系列会社・丸本化工印刷㈱を吸収合併、(株)丸本商店福岡工場とする 倍額増資（資本金一千万円）

昭和46年12月	54歳	福岡県粕屋郡志免町大字別府に福岡工場新築移転
昭和47年6月	55歳	島原営業所を田屋敷本丁1087の1に移転
昭和48年2月	56歳	増資（資本金千五百万円）
昭和48年5月	56歳	ヨーロッパ視察旅行、西ドイツより広巾製袋機を福岡工場に購入
昭和49年8月	57歳	喜々津工場を新築増設
昭和49年10月	57歳	福岡にて丸本グループ第1回の包装展開催
昭和50年2月	58歳	創立25周年　ハワイ社員旅行
昭和50年8月	58歳	福岡工場にグラビア5色印刷機増設
昭和50年10月	58歳	倍額増資（資本金三千万円）
昭和51年3月	59歳	本社社屋ビル新築、現在地に移転。称号を株式会社丸本に改称
昭和53年1月	61歳	卸センター団地にセンター営業所新設。総括本部を設置
		経理・仕入を統括する
昭和53年8月	61歳	福岡工場にグラビア4色機増設
		喜々津工場に発泡バリアー機及び家屋増設
昭和54年8月	62歳	総括本部コンピューター導入
昭和55年2月	63歳	創立30周年卸センターにて包装展・得意先ゴルフ大会・北海道社員旅行

昭和55年3月	63歳	系列会社・熊本グラビア㈱を設立と同時に代表取締役就任
昭和55年6月	63歳	福岡丸本㈱役員改選により、取締役会長に就任
昭和55年10月	63歳	喜々津工場隣接地を買収
昭和56年1月	64歳	喜々津工場の発泡スチロール（FS）工場、防音設備工事完了 諫早中核団地に四千坪の土地購入
昭和56年10月	64歳	卸センター営業所隣接地に第2営業所増設
昭和57年3月	65歳	諫早中核団地の長崎工場第一期工事（FS工場）着工
昭和57年4月	65歳	長崎工場第一期工事完了後、喜々津工場よりFS部門移転
昭和57年6月	65歳	FS工場操業開始。長崎工場第二期工場（グラビア工場）着工
昭和57年7月	65歳	系列会社・㈱マルユを設立と同時に代表取締役就任
昭和57年9月	65歳	丸八物産㈱を吸収合併、㈱丸本島原工場とする
昭和57年10月	65歳	長崎県西彼杵郡多良見町の工場敷地売却
昭和57年12月	65歳	長崎工場移転完了し、操業開始。福岡新工場完成
昭和58年1月	66歳	長崎商工会議所議員となる
昭和58年8月	66歳	卸センター2つの営業所を統合し、センター営業所とする 長崎工場にてビニールハウス加工工場操業開始

昭和59年4月	67歳	大阪中小企業投資育成(株)より資本金二千万円導入 (資本金八千万円)
昭和59年5月	67歳	松浦市に工場用地購入 六一〇五・八九m ²
昭和59年6月	67歳	長崎工場(FS工場)増設
昭和59年8月	67歳	福岡工場 高速グラビア5色印刷機購入
昭和60年4月	68歳	三重新漁港に工場用地購入 一七四五・〇三m ²
昭和61年8月	69歳	創立35周年 シンガポール社員旅行
昭和62年10月	70歳	長崎日通倉庫にて包装展開催
昭和63年6月	71歳	系列会社・東海包装資材(株)を設立と同時に代表取締役就任
平成元年8月	72歳	(株)マルユ製版部買収
平成2年3月	73歳	系列・マルサン化工(株)を設立と同時に代表取締役就任
平成2年6月	73歳	社長交替。代表取締役会長に就任
平成3年	74歳	創立40周年 香港社員旅行
平成3年7月	74歳	紙グラビア広幅印刷機の設備(九州初)
平成3年9月	74歳	丸本生科研(株)を諫早市に設立
		台風19号により、マルサン・他工場 被害を受ける

平成5年6月	76歳	系列会社・熊本グラビア(株)新築移転、軟包装衛生協議会認定工場となる。(平成6年2月)
平成5年7月	76歳	福岡工場 高速グラビア8色機増設
		系列会社・(株)マルユに、ラミネーター機増設
平成6年9月	77歳	長崎営業所・センター営業所を統合。営業本部発足
平成9年8月	80歳	前立腺肥大で生まれて初めての入院、手術
平成11年2月	82歳	創業49周年 社員の家族を招待しての創立式典を開催
平成12年2月	83歳	(株)丸本退任 (株)丸本相談役就任
平成16年2月	87歳	創業54周年創立式典にて卓話する
平成16年8月	87歳	「米寿を祝う会」に出席
平成17年6月	88歳	自宅にて療養
平成18年12月	89歳	逝去

あとがき

これは株式会社丸本の創業者である故丸本柳八（享年90歳）の回顧録であります。昭和四十二年から発行しております「オール丸本」の社内報に掲載されていたものを一部書き直したり、新たに続編を書いていただいたり、朝礼でのお話しを書きしるし編集したものです。昭和二十五年に丸本柳八が個人経営で創業致しましてから、五十周年（平成十二年）を迎えるにあたり改めて創業者の歩んできた道のりを「整理記録」しました。この回顧録がこれから歩もうとする未来に向って私共に勇気を与え道標になると思います。発行致しました。故山口勇様に暖かいご寄稿いただきましたこと、中村啓一郎君に千々石の思い出イラストを描いていただいたことを感謝申し上げます。

丸本柳八は平成十八年十二月をもって永眠致しましたが創業者の魂は、私たち社員が引き継いで参ります。

平成十八年十二月

株式会社 丸 本

各位へ

代表取締役社長 西川 範子

人生でこぼこ

発行 第一刷 平成十二年一月十八日

第二刷 平成十九年一月十九日

著者 丸 本 柳 八

発行所 株式会社 丸 本

長崎市大井手町五二番地二

TEL (〇九五) 八二一—五三三〇代

印刷所 大和印刷株式会社

長崎県諫早市天満町一八—五

TEL (〇九五七) 二三—三三三四

カット 中 村 啓一郎

